東方漫遊記

犬兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方漫遊記

【Ｎコード】
Ｎ０７９６Ｌ

【作者名】
犬兎

【あらすじ】
幻想郷を、遊べ。

東方妖紀行から数ヵ月後。幻想郷は記録的な猛暑に見舞われた。
そんな中でも変わらない幻想郷の人々の生活。
だが、そこに吹くのは新たなる風。
いつもとちょっとだけ違う幻想郷の夏がやってくる。
始まりは海開き。そして、最後に待つのは異変。

世界を作る妖怪と呼ばれる少女を巡り、博麗霊夢と現代妖が激突する。

現代妖と幻想郷の妖怪たちの物語――――東方漫遊記。

このサイトに投稿している妖紀行×東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。
前作、東方妖紀行の続編になります。
それらと併せてお楽しみください。
また、妖紀行のネタバレも含みますのでご注意を。

第一章・幻想郷海開き　序章

幻想郷に新たなリゾート地！　幻想郷海水浴場オープン。

一週間前、妖忌妃、智魅さまの発案を持って始まった幻想郷海開きプロジェクトは智魅さまの力で海を呼び寄せ完成した。そして、今回ついに人間向けのリゾート地として幻想郷海水浴場がオープンする。

幻想郷海水浴場は、魔法の森に住む霧雨魔理沙発案の元、霧雨魔法店の主催でオープンする。人間や妖怪たちが皆一様に集まって遊べる空間となるよう、霧雨魔理沙や博麗の巫女が監視員として妖怪たちの指導に当たるそうだ。子供たちも安心して遊べるよう、海水浴場近隣のエリアでは弾幕ごっこなど危険を伴う遊びを禁止するなど配慮するようだ。「海にはもっと楽しい遊びがある。私はそれを指導していきたい」と霧雨魔理沙は語る。

また、海水浴場は無料で遊べるが、遊泳には水着着用が義務付けられる。これは外の世界のルールであり、守るべきマナーであると山の巫女が提案したことで、川遊びとは違うので注意。水着は海水浴場内にオープンした「海の家・霧雨魔法店」や香霖堂でも販売している。

文々。新聞　夏・海開き記念号外より抜粋

第一章・幻想郷海開き

「いやしかし、まさかこんな猛暑になるとは思っていなかったわ」
つい先日まで春告精が現れるほどに冷夏が続いていた幻想郷は記録的な猛暑に見舞われ、智魅は避暑にと守矢の神社を訪れていた。
昼食後、智魅は暑さにすっかりやられてしまっている諏訪子を見て笑っていた。
「今まではこんなに暑くなることはなかったんですけど」
「異常気象が幻想入りしたのかねぇ・・・。妖忌妃さまの力で何とかできないもんかい？」
神奈子の言葉にそんなことしたら神の力の意味がないでしょう、と智魅は言う。確かにそうだ。天候や気象は神のみぞ知ること。智魅が自在に操ってしまえば、その神の存在意義がなくなり消滅してしまう。でも、こんなに暑いと幻想郷の農作物が心配ですね、と早苗が言う。
「冷夏の後に極端な猛暑ですから。――水不足も深刻ですし。穀物や野菜の供給がどうなるか・・・水産物に頼ることも出来ませんしね」
「水産物？　そういえば、幻想郷に来てからあまり魚を食べた記憶がないわね。――もしかして、水産物は取れないのかしら？」
実はそうなんです。そう言いながら早苗は幻想郷の水産物事情を話し始めた。幻想郷に海はない。それゆえに海産物は一切取れないのだ。人間の里に行けば一応、魚屋はある。だが、その店も普段はあまり品揃えは良くない。なにしろ外の世界から買い付けるのだ。八雲紫の気が向いたときくらいにしか生の魚など入ってこないのである。普段は干物しか売っていない。新鮮な魚など、川や湖で釣って食べるくらいしかないのだ。
「幻想郷には海がないのね、驚いたわ。――うーん、そりゃ不便ね。山の幸は豊富でも、それじゃ現代っ子は物足りないんじゃない

？」
「私は大丈夫ですけど――諏訪子さまが」
「あーうー。そんな話してたら久しぶりにお刺身食べたくなってきた」
「神さまが人間より我慢弱いとは。情けないものね」
でもこの状況を打開するには、ひとまず安定した食糧供給が必要ね。智魅は言う。そして、一つ思いついた。
「海を作りましょうか。私の力なら呼び寄せるくらい出来るわよ」
その発想に神奈子は笑う。
「なんだい。あんたのほうこそ我慢弱いじゃないか」
「そうじゃないわよ。このままじゃ幻想郷は大飢饉よ。それをどうにかするために気候の条件に左右されにくい海産物を補給するのが一番手軽なの。――まあ、そこまで完璧な打開策になるわけじゃないけど。それでも餓死する人間はいなくなると思うわ」
いいですね、と早苗は言う。それに海があれば海水浴も出来ますし、と言っている。とても楽しげにしている早苗に神奈子と智魅は笑った。
「そういや、幻想郷に来るちょっと前に水着買ってたよな。――あれって結局一回しか着ていないんじゃないかい？」
「そうなんです。友達と海水浴に行ったっきりで、もったいないなって思ってたんです」
神奈子はいい機会じゃないか、と智魅に言う。
「やってみようか。幻想郷の海開き」
決まりね、と智魅は言う。
こうして、幻想郷海開きプロジェクトがスタートした。

第一章・幻想郷海開き　二人の巫女の夏

紫によって提供された土地は智魅が最初に訪れた丘だった。住む人もいなく、妖怪も妖精も寄り付かないという作り変えるには絶好の場所だ。智魅は自らの力を使い、その場所に幻想の海を作り上げる。数分もしないうちに、その場所は水平線が広がる空間になった。

「ある程度行くと結界に阻まれて進めなくなるように作ったわ。まあ、幻想郷だし、細かいことは気にしないで頂戴ね」

早苗は目を輝かせて海を見ていた。早速皆で遊びましょう、とすごく楽しげにしている。こんなに喜んでくれる人がいるなら作りがいがあったものだ、と智魅は笑っていた。

「私はいったん紫に報告してくるわ。人間の里で漁を行う者たちを募らないといけないからね。――――じゃあ、後は皆で楽しむといいわ」

智魅はそう言って姿を消す。泳ぐぞー、と早苗は既に服の中に水着を着込んであったのか、すぐに服を脱いで海に向かって行った。

諏訪子はニヤニヤしながら神奈子を見る。

「水着、持ってないでしょ。残念残念」

「お前だって同じだろ？　残念残念」

強がる神奈子に、残念でした、と諏訪子が笑う。

「早苗が小学校の頃に着てたスクール水着、サイズがぴったりだったんだ。残念でした」

私も行くよ、と諏訪子も服を脱ぐ。彼女も既に服の下に水着を着てから来ていたようだ。二人は楽しそうに海で遊んでいる。神奈子はちょっと悔しそうに二人を見つめていた。

「あいつら・・・」

なにやら楽しそうな雰囲気を察知したのか、はたまたただの気まぐれの散歩の途中だったのかは定かではないが、霧雨魔理沙がやってくる。おー、と大きな声で叫び、そして彼女も目を輝かせていた。

「これは、海じゃないか！　いつの間に幻想郷入りしたんだ？」
妖忌妃さまが作ったんですよ。早苗が言うと、魔理沙はテンションが上がっているのか、ものすごく楽しげに周りを見渡している。
「これで無駄に暑苦しい夏とはおさらばだぜ」
魔理沙はそう言って服を脱ぐとすぐさま海に飛び込んだ。
「ちょっ、魔理沙さん！　水着は！？」
下着姿で海に飛び込む魔理沙に早苗が注意する。だが、魔理沙は全く気にしないで泳いでいた。
「そんなもの持ってないぜ！　別に誰がいるわけでもないんだ。いいじゃないか、細かいことはっ！」
「――――もう・・・魔理沙さんってば」

博麗神社は相変わらず人気がない。流星異変の後、しばらく智魅が住んでいたため、その間はいろんな人間や妖たちが訪ねてきたが、智魅が魔法の森に居を構えるとすっかり閑古鳥が鳴いた。当然、賽銭も入らず毎日質素に生活している――――かと思えばそうでもなかった。萃香と一緒にいる機会が多くなった現代妖の鬼二人。彼らは人間の里で生活しているため、萃香に会いに来るたび、土産の品にと里の食べ物やお酒を持ってくるのだ。かつての扶養家族が今ではすっかり大黒柱である――――けしていい意味ではないが。
今日も今日とて萃香に会いにやって来た高野と睦月。博麗霊夢は上機嫌で彼らを迎え入れた。萃香も近所に同胞がいてくれるのが嬉しいのか、いつも二人が来ると嬉しそうにしている。待ってました、と早速昼間から酒盛りが始まった。
「いやー。しかし智魅さまがいなくなってからすっかり寂れましたね」
不意に高野が言う。しかし霊夢は案外そうでもないのよ、と笑顔

で答えた。
「実は、毎日熱心に参拝に来てる子がいるのよ。最近幻想郷にやってきた子みたいなんだけど。見たこともないお金を賽銭箱に入れていくのよ。最初はおもちゃのお金かと思ってたんだけど、一応、霖之助さんのところに持っていったら、もうすっごい大金でね」
外の世界は幻想郷より物価が高いのね、霊夢は言う。高野はそうですね、と笑っていた。
「まさかこっちに来て未だに古銭が使われているとは驚きでしたよ。それで、そのお金は換金できたんですか？」
「それが、霖之助さんも『貨幣として流通していない貨幣はただの金属片だ』って。買い取ってもくれなかったわ――――紫なら取り替えてくれそうだけど・・・」
彼女のことを便利屋か何かだと思っているのだろうか。高野は呆れ笑うと同時に、五大妖とも肩を並べるあの八雲紫をその程度の存在と認識する彼女に改めて驚いた。人間と妖の間に線を引くことなく接する彼女こそ、まさしく妖忌妃が夢見た理想の存在だ。
「なに笑ってるのよ、高野」
「いえ・・・昔、霊夢さんのような人と仲が良かった時期がありましてね。それを思い出したんですよ」
それこの間、智魅が言ってた男の人の話？　霊夢が訊ねると、恐らく同じ人間のことでしょうね、と答える。
「前から気になってたのよ。――――智魅もあんまり話したがらないし。ねぇ、その人、どんな人だったの？」
そうですねぇ、と高野は腕を組み考える。すると、隣の睦月がアイツは面白いヤツだったよ、と答える。
「妖の研究家でね。あちこち出かけてはいろんな妖にちょっかいかけてたな――――あたしもアイツとは何度もケンカした」
でもアイツ、強いんだよ。睦月はニヤニヤ笑っている。
「アイツ、確かヤナセメイ倒したよな？　外の世界最強の吸血亜種」
「ええ。彼女と一緒に『東京妖魔社』を設立し、そこで雑誌を出版

してました。――今は、確か・・・」
そこまで話した時、空から勢いよく少女が落下してくる。危なげに着地すると、縁側に両手を付き、大ニュースです、と叫んだ。
「幻想郷に、海が出来ました！」
その言葉に、皆、特に反応もなく。
「エイプリル、フール、だっけ？　外来のウソ報道」
「あれは四月一日の午前中だけですよ。――午後からは、ウソを付いたと言うことを認め、訂正しなくてはいけないんです」
霊夢と高野はそんな話をしている。萃香も気にしていないのか、睦月が持ってきたから揚げを食べている。ウソじゃないんです、と少女は叫ぶ。
「ブン屋。真実を報道するのが使命じゃなかったの？」
「ですから、私はいつも清く正しい射命丸ですっ！」
妖忌妃さまが海をお作りになったんです！　文の言葉に、睦月はマジか、と呟いた。妖忌妃ならそれぐらいたやすいことだからである。彼女の名前が挙がったことで、信憑性が増してくる。霊夢も少しは興味を持ったのか、どこに出来たの？　と文に訊ねた。
「妖忌妃さまが幻想入りされた丘のあった場所です。――今年の異常気象による大飢饉を緩和するために紫さんから許可を取って作ったそうです」
そう、と霊夢はゆっくり立ち上がった。そして、三人の鬼を見て、笑っている。
「三人とも。海に行くわよ。――今夜は鯛でも食べましょうか」

第一章・幻想郷海開き　それぞれの海

いつの間にか、海にはたくさんの妖怪と人間たちがやってきていた。やはりこの猛暑の中、暑さを凌ごうと海に泳ぎに来ている者たちが多くいるのだが、そこにいる者たちのマナーの悪さに早苗は少々いらだっている。人間たちもいる中に弾幕を放り投げる妖怪や水中で悪戯を仕掛けてくる妖精、それ以前に男性もいるこの状況下でも気にせず全裸で泳ぐような連中もいる。暑さでイライラしているのが良くないのだと、早苗は素潜りして頭を冷やす。だが、水中でバカ妖精が早苗の水着の紐を引っ張った。

「――――っ！」

びっくりして一気に息を吐き出してしまう。水着を抑えてそのまま上がり、まずは呼吸を整えて、水着を直す。氷精チルノはバカみたいに空中で笑っていた。

「水の中でそんな服着てるからだよっ！」

チルノはそう言いながらそのまま飛んで、また海に潜る。どうせまた誰かに悪戯するのだろう。一度、幻想郷の住民には海水浴のマナーを教える必要がありそうだ、と早苗は思い、浜辺に上がる。諏訪子と砂遊びに興じる魔理沙を呼び、早苗は彼女に提案した。

「――――監視員？　なんだそりゃ？」

「海水浴、というものはちゃんとしたマナーとルールがなければいけないと思います。スペルカード戦と一緒です。――――魔理沙さんが妖怪と人間が一緒に遊べるように指導してはくれませんか？」

魔理沙は乗り気じゃないのか、うーん、と唸る。だが、周辺の状況を見る限りでは明らかに無法地帯。人食い妖怪に妖精の悪戯。そして飛び交う弾幕。恐らく今日来た人間はこれ以降海には近付かないだろう。由々しき事態だと思うのは確かだ。

「ま、確かにどうにかすべき状況ではあるな。子供にゃ危ない」

「でしょう？　ですから、監視員に・・・」

「お前がやればいいじゃないか。――――私だって暇じゃあない」
「私のほうが忙しいと思いますが？」
返す言葉もない。魔理沙は観念したのか、分かったよ、と言う。
「じゃあ、よろしくお願いしますね。――――色々私が指導しますので」
「ああ。早苗からの依頼となれば、断る理由もないしな。――――代金のほうは私の口座に振り込んでおいてくれ」
「銀行がないでしょう。幻想郷」
その返しに、いいツッコミだぜ、と魔理沙は笑っていた。

その頃、人間の里では智魅が漁師を募っていた。船と網は全て智魅の能力を持って用意するという好条件に、今年の収穫を見込めない農家の男手が挙って名乗りを上げる。最終的には魚屋たちが結成した漁業組合の元で審査をし、その中で決定した十数名が漁師となった。
「――――今年はこの通りの異常気象で恐らく大規模な不作となるでしょう。ですが、皆さんが協力していけば必ず乗り切ることが出来ます」
智魅の言葉に里の人間は歓喜した。妖忌妃のことを信じて疑わないといった様子である、だが、智魅はこれ以上人間に協力することはしないと考えている。自分の力は確かにどんなことでも可能にする力だ。だが、それに頼りきってしまえばその存在が堕落し、先に進むことをやめてしまうのだ。幻想郷の人々は、そんな存在にはしたくない。彼女はそう思うからこそ、ここではっきりと言い放つ。
「後は皆さんで決めてください。――――私が与えたものをどう使うかは、皆さんの自由です。生かすも殺すもあなたたちしだい。どうか、いい決断をしてくださいね」

智魅は姿を消した。そして、再び海に戻ってくる。
「うーわ。無法地帯ね」
智魅はドン引きしていた。呆れ笑う神奈子。
「ま、原始人の自由遊びなんてこんなものだろ」
「――原始人じゃないでしょ。知恵も美徳も兼ね備えた現代妖怪よ」
智魅は弾幕禁止と大声で全員に呼びかける。しかし守る気はないのか、低級妖怪たちは人間に弾幕を投げつけて遊んでいる。智魅は仕方ないわね、と妖怪たちの間に割って入る。
「確か、あなたはルーミア、だったわね。――人間に弾幕をぶつけるのはやめなさい。ここは皆で楽しむ場所。なんでもしていいってわけじゃないのよ」
「そーなのかー」
聞く耳持たないといった様子――と言うより聞く耳――それ以前に知恵がないのだろう。智魅は実力行使で行きますか、と呟いて、ルーミアにナイフを投げつける。
だがルーミアも軽がる回避。そして智魅を見て、あはは、と笑った。
「弾幕ごっこ？　いいよ、やろっか？」
ルーミアは最初から本気なのか、一斉に弾幕を放つ。しかし、智魅は周辺の被害を考えてか、ルーミア以上に本気でかかった。
「強制強奪『バスターポケット』！」
ルーミアの弾幕は姿を消し、そして同時に弾幕がルーミアの目の前に出現する。当然、かわせるはずはない。被弾し、海に落ちるルーミアをワープさせどこかに送る智魅。
「これでよし。悪いけど、警告はしたんだもの。仕方ないわよね」
その辺にいる妖怪たちも分かってるでしょうね、と智魅が脅す。見せしめ作戦はうまくいった様だ。皆は弾幕禁止のルールを守り、マナーの悪さは多少、改善された。
「――ようやく少し静かになったわね」

岩場の影で釣り糸を垂らしている霊夢と鬼三人。霊夢は呟いて、上機嫌に微笑んだ。
「今日はお刺身よ。———智魅も呼んで、宴会でも開きましょうか？」

第一章・幻想郷海開き　幻想郷の夏

その夜、八雲家では新鮮な魚が食卓を彩っていた。
「わぁ、すごいですねー、藍さま！」
「ああ、妖忌妃さまから頂いたんだ。――――まさか海を作るとは、相変わらずすごい力を持ったお方だ」
紫はそうね、と笑っている。だが、それと同時に嫌な予感も募らせている。どうかしたのですか、と問いかける藍。紫はそろそろかもしれないわね、と答えた。
「そろそろって、何ですか？」
「――――私が恐れていた事態が起こるかもしれないわよ」
それはもう終わったのではないのですか？　藍が言うと、まさか、と紫は言う。モリノユウの幻想郷入りはただの最悪のケースに過ぎないわよ、と紫は呟いた。
「私が本来恐れていたのは、強力な現代妖が幻想入りすることで起こるパワーバランスの崩壊よ。モリノユウはそれらの過程の中で起こる問題でしょう？　それを解決しただけで根本を解決したとは言えないわ。幽々子も色々調査してくれているみたいだけど、限度があるし」
ここは、一度私が調査に行くしかないのかしら。紫はそう言いながら、ため息一つ、橙を見てにっこり微笑んだ。
「さ、暗い話はここまで。――――頂きましょうか？」
それから数日して、早苗は幻想郷の海水浴のルールを定めた。水着着用、遊泳禁止エリアの基本的なルールに加え、弾幕禁止などの幻想郷ならではのルールを定めたその基本方針を守り、遊泳するよう指導するようにと早苗は魔理沙に教え込む。魔理沙も魔理沙で早苗の水着が気になったのか、水着のデザインと作成をアリスに依頼し、様々なデザインの水着を用意した。これらを流通させ、商売でもしようかとたくらんでいるらしい。

海水浴場には海の家があるということを聞いて、魔理沙と霊夢がタッグを組んだ。これはいい商売になると魔理沙は霊夢に持ちかけ夏の間、海の家を経営させようとしているらしい。土地の確保と建物の建設は魔理沙とその協力者が行い、霊夢の料理で一儲けするつもりなのだろう。魔理沙は鬼と河童の協力を得て、数日で海の家を完成させた。

こうして、幻想郷に海水浴場がオープンした。

初日はたくさんの人と妖怪で賑わい、水着も飛ぶように売れた。そして海の家も霊夢の料理のおかげか大盛況である。妖怪の行動は魔理沙がしっかり監視し、人間に被害が及ばないように配慮されたその空間は、まさに誰もが楽しめる場所となったのである。

その日の夜。海の家・霧雨魔法店では、霊夢主催の宴会が行われた。がっぽり稼いだため、かなり上機嫌の霊夢。今日は奢りよ、とあの守銭奴が大盤振る舞いだ。

「しっかし、海ってのは儲かるもんだな。――――巫女なんか辞めて転職したらどうだ？」

「いっそそうしたいくらいよ。――――忙しいけど、働いてるって気がするもの」

巫女なんかよりずっといい職業よ。霊夢はそう言いながら笑っていた。実際、人当たりも良く料理も上手な彼女にはこういう飲食店の経営が天職なのかもしれない。

「霊夢ー。お酒足んないよーっ！」

「はいはい。今もって行くから待ってなさい！」

霊夢はそう言いながら、萃香に酒を持っていく。いつもとは違う、生き生きとした霊夢に、魔理沙は笑う。

騒がしくも、楽しい夏の夜は更けていく。

幻想郷は今日も平和だ。

第一章・幻想郷海開き　／了

第二章・三人目の巫女　序章

幻想郷入りの少女、正体は創世の巫女！？

流星異変のすぐ後に幻想入りしたと思われる人間の少女が守矢神社を訪れた。守矢神社のある妖怪の山は現在無法妖怪の取り締まり強化中であり、人間が立ち入ることは出来ない。彼女がいかに山へ侵入したのかは定かではないが、その少女、なんとあの双成家の人間であると言うことが発覚した。双成家は外の世界では古来より創世の巫女という立場を担う家系であり、その能力は未だ明らかにされていないものの、博麗の巫女とも並ぶ実力を持っていることは明らかだ。

妖忌妃さまは、現在、この創世の巫女を預かり、幻想入りした原因やその能力を調査している。結果が出るまでは、彼女には不用意に近寄らないのが得策である。なにせ、創世と名のつく巫女だ。きっと妖怪にはよろしくない能力に決まっている。

文々。新聞・幻想郷入り情報、編集後記より抜粋

～現代妖が幻想入り２

第二章・三人目の巫女。

とある夏の午前中。博麗霊夢は境内の掃除をしていた。何せ午後になる前には海の家で働くのだ。神社のことは全て午前中のうちに済ませなければならない。萃香に任せられないことはないのだが、根が不真面目な彼女のことだ。出来ることならば任せたくない。掃除、洗濯にと大忙しだ。

そんな中、博麗神社を参拝に来た物好きに挨拶する。以前高野に話していた子である。明らかに外からやってきたと思われる身なりをしたその少女は相変わらず外の世界のお金を賽銭箱に入れていく。彼女が来るようになってから既に一ヶ月は経過しているというのに、ずいぶんと小銭を持っている少女だと霊夢は思う。そろそろ外の世界のお金が尽きて、幻想郷で稼いだお金を入れてくれてもいい頃だろうと思うのだが、一向にお金が尽きる様子もない。紫に訊ねたところ、まあ当然のことなのだが外で使うときと同じ物価に換算しての交換しかしてくれないらしく、小銭はいくら積んでも小銭にしかならない――――ないよりはましなのだが。

「――――あのね」

霊夢は少女に言う。

「この神社には神様はいないわよ」

その言葉に、少女はえ？　と首をかしげた。

「でも、ここ、神社――――ですよ、ね？」

困ったような少女の表情。周囲を見渡してそしてここが神社であることを確認する。じんじゃ、と鳥居を指差して言うが、霊夢はま

あ、見た目はね、と答える。
「神社であることは確かよ。でも、神様はいない。――この通り不真面目な巫女でね。神様は愛想尽かしてどこかに行ったっきりよ」
「神様って、自由に動き回れるんですか？」
「ええ。そうよ。神様はね、信じているものがいる場所に現れるわ。でも、私みたいに信仰しない者には寄り付かないの。だから、この神社には神様はいないってこと――妖怪の山の上にある神社なら、神様がいるから、今度からはそっちに行くといいわ」
霊夢はそう言って、少女を追い返した。そして、ため息一つ、空を見上げる。
「私も歳かしらね。――あんなバカなこと言って」
金づるを自らの手で離した。霊夢とは思えない行動だった。自分でも驚くほどに、それをやって見せた。霊夢は寂しそうな瞳をして、そのまま動かない。
「もうすぐ、なのかも知れないわね」
「何がもうすぐなのさ？」
萃香が霊夢のほうにやってくる。
「あら、萃香」
「よう。霊夢。今日も海に行くのかい？」
「まあね、稼ぎ時だもの。稼げるうちに稼がないと」
萃香は瓢箪の酒を飲みながらまるでそのうち稼げなくなるような言い方だね、と言う。その言葉に、霊夢は言葉を詰まらせた。
「そっか、もうそんな頃合か。月日が経つのは早いもんだ」
「――そうね」
霊夢は目を閉じて呟くように言う。でも、と付け足してすぐに笑顔に戻るが、萃香には分かる。彼女の心の内が。
「皆には内緒よ。――知れたら、それこそ大問題だもの」
「分かってるって。それより、今日は早めに海に行ったほうがいいよ」
「何かあったの？」

「――とびきりの上客が来る」
萃香はにやりと笑って、海のほうを指差した。
「海から生まれし生命の原初、五大妖が一人、水妖妃さまだ」

第二章・三人目の巫女　水妖妃と魔理沙

魔理沙は今日も気まぐれで海にやってきていた。黒い服は太陽の熱を吸収してそれはもう暑い。すぐにでも水着に着替えて海に飛び込みたいが、今日はそうも行かない。荷物になるからと水着は持ってきていないのだ。

今日の魔理沙の目的はキノコ探し。パチュリーから聞いた話によると浅瀬に生えるという珍しいキノコがあるというのだ。キノコマニアとも言えるほどの彼女にとって、レアなキノコは喉から手が出るほどの物だ。浅瀬をくまなく探して、彼女はすっかり汗だく。とうとう疲れきったのか、岩場の影に座り込む。

「くそ――――まさか、ガセネタか・・・？」

靴を脱ぎ、海に足だけつけてばしゃばしゃと水面を蹴りながら魔理沙は呟く。周囲を見渡しても、苔の一つもない。手元にカニが歩いているのを発見して、手に取るが、ハサミで挟まれてすぐに放り投げる。

ああもう、と魔理沙は帽子を脱ぎ、その場に倒れこんだ。暑さでイライラが募る。でも、キノコは欲しい。しかし、こうも見つかる気配がないのはさすがの魔理沙もお手上げだ。

しばらくそのままの格好で倒れていると、一人の少女がこちらにやってくる。一体何なのかと思うと、魔理沙の傍らに置いてあった帽子を手にとって、それをじっと見つめている。

「なんだ、帽子が珍しいのか？」

魔理沙が訊ねると、少女はまあな、と答えた。

「普通、海には麦藁帽子じゃろう。――――こんな妙な帽子、暑いではないか」

「暑くて結構。――――魔女ってのは形にこだわるもんだ」

「ほう、貴様、魔女なのか？」

「そういうお前は妖か。――――私を知らないってことは、新参者だ

な」
　起き上がって帽子を取り返すと、魔理沙は立ち上がる。名前は、と訊ねるがその少女は答えない。名前など些細なことじゃろう。少女の言葉にそりゃそうだ、と呆れ笑う。
　色の抜けた白い髪に、純白のワンピース。とてもじゃないが強そうな妖には見えない。一体何なのだろうか。魔理沙は思うが、まあ、妖怪の気まぐれなどいつものことだ。ただ近くにいたから話しかけて来ただけなのだろう。魔理沙は靴を拾うと、じゃあな、と岩陰から出て行く。少女はまあ待て、と魔理沙を呼び止めた。
「――――スイヨウマイタケを探しておるのじゃろう？」
　魔理沙は足を止めた。そして、振り返る。
「何だ。お前、知ってるのか？」
「うむ。童の大好物じゃ」
「どこにあるんだ！　教えてくれ！」
　少女の肩を掴み揺さぶる魔理沙。しかし、少女は答えない。
「そう簡単に教えられるものではないぞ。自分で探すのじゃな」
　では、な。少女はそう言ってどこかに行ってしまう。あると言うことを聞いてやる気が出たのか、魔理沙はよし、と呟いてまたあちこち歩いて探す。
　そうこうしているうちに昼になった。魔理沙は昼食を取ろうと霊夢の海の家にやって来た。今日も客でにぎわう店では、霊夢が忙しく働いている。
「よう、霊夢。来たぜ」
「ああ、魔理沙。いらっしゃい」
　ちょっと待っててね、と霊夢は笑顔で対応する。いつもの霊夢を知っている魔理沙からすれば非常に気味が悪い。しばらくして少し客が少なくなると、霊夢は魔理沙のところにやって来た。
「いやいや、急がしいったらありゃしないわ。ミスティアが手伝ってくれてるからいいようなもんよ」
「結局雇ったのか。あの夜雀」

「まあね。妖怪って言ってもいい子だし。――――歌はアレだけど」
霊夢はそう言いながら自分の代わりにあくせくと働いているミスティアを見た。私も仕事に戻るわね、と霊夢は立ち上がる。
「なんでも今日は上客が来るって萃香が言ってたからね。稼ぐわよ」
昼食後もあちこち探してみたものの、結局例のキノコは見つからない。完全に万策尽きた魔理沙は砂浜に寝転がっていた。
「疲れた・・・。もう帰ろうか」
魔理沙の言葉を聴いていたのか、少女が再び現れた。少女は魔理沙の上に乗りかかるとニヤニヤ笑っている。
「見つからなかったようじゃな」
「ああ。無かった」
「――――しょうがない奴じゃの。ホレ」
少女が魔理沙に見せたのは真珠色に輝くキノコ。おお、と魔理沙は嬉しそうにそれを手に取った。
「これが噂のスイヨウマイタケ！　ああ、この輝き・・・」
目を輝かせて喜ぶ魔理沙に少女はお前にやる、と言って立ち上がった。いいのか、と念を押す魔理沙に構わん、と少女は笑う。
「実を言うとな、そのキノコは幻想郷には無い。お前があんまり必死に探しておるから童も気になって探したんじゃが、どうやらこの海はまがい物のようでな、それが自生する環境ではないようじゃ。それで仕方ないから童が特別に用意した。感謝せぇよ」
魔理沙はそんな言葉聴いていないようで、完全にキノコに魅入っている。やれやれ、と少女は呟いて海を眺める。
「いい海じゃ。――――平和で何より」

第二章・三人目の巫女　霊夢と創世の巫女

海の家にやって来た上客は魔理沙だった。私の奢りだ、と少女を連れてやってきたのである。よほどスイヨウマイタケが嬉しかったのか、店のメニューを片っ端から注文し、その辺にいる人々にも振舞う。どんちゃん騒ぎ、そしてすっかり夜も更けた。

「全く、魔理沙ったら、こんなところで寝て・・・」

霊夢は呆れ顔で酔っ払って寝てしまった魔理沙を見る。そして、その隣でまだ飲んでいる少女に視線を移し、あなた、見ない顔ね、と話しかけた。

「うむ、童はつい先日、ここに来た者じゃ」

「――――現代妖ね。名前は？」

「童に名はない。――――水妖妃と呼ばれておるからそう呼べばよい」

その言葉を聴いたミスティアが途端に震え上がった。

「す、水妖妃さまっ！？」

「何、知ってるの？」

「知ってるも何も、妖忌妃さまとも互角に渡り合える原初の妖怪ですよ！　存在をつかさどる妖忌妃さまと生命をつかさどる水妖妃さまといえば、妖怪で知らないものはいないくらいに有名です！」

生命、という言葉に霊夢は反応する。生かすも殺すもあなたしだいってワケか、と呟くと霊夢は笑う。

「全く、そんな実力者が幻想郷に来るってことは、ついに外の世界の妖怪は絶滅ってことかしら？」

「うむ。童を以って最後じゃな」

水妖妃はそう言って、ニヤニヤ笑っていた。

「いずれ争いが起こるじゃろう。その時はよろしく頼むぞ」

水妖妃の言葉に、霊夢は頷く。

「安心しなさい。私が博麗の巫女よ」

そうか、と水妖妃は嬉しそうに言った。

「楽しみにしておるぞ、博麗の巫女」
「ええ、任せてちょうだい」
二人はそう言って笑顔になる。ミスティアは一体何の話をしているのか分からず、二人の顔を交互に見合わせていた。
それからしばらくして、海の家に客がやってくる。今朝の少女だ。一体どうしてここに来たのか、今日はもう店じまいよ、と霊夢は言うが、その少女は笑いながら、あの、と喋りだす。
「守矢の神社に行ったのですが、そこで、ちょっと色々ありまして」
あんな無法妖怪にあふれた危険な山を本当に登ったのか、と霊夢は驚く。興味を持った霊夢は彼女の話を聞くことにした。
「哨戒天狗に遭ったでしょう？」
「ええ。まあ・・・。でも、私のことを知っていたのか、名前を名乗るだけで通してくれました」
「――へえ、有名なんだ、あなた」
「それで、守矢の神社に行くと、そこで追い返されまして」
「追い返すって、あの早苗が？」
「いえ、早苗さんはとても親切だったんですが、その、諏訪子さんに」
「諏訪子が、ねえ・・・。珍しいわね」
「どうやら私は神様に嫌われちゃってるみたいで」
神に嫌われる少女とはこれいかに。彼女は何かやらかしたのだろうか。霊夢がその辺を訊ねると、名前を名乗るだけでもうダメでした、と答える。
「――あんた、名前は？」
「双成未来といいます」
そうせい、その名は聞いたことがあった。しかし、どうにも忘れっぽい霊夢は思い出せない。しかし、代わりに水妖妃が答えてくれる。
「お前、創世の巫女か？　ほう・・・まだ生きておったとは」
こりゃ面白くなってきた、と水妖妃が言う。

「創世の巫女・・・。なんだっけ、それ」
「世界を作り変える力を持った巫女という話じゃな。じゃが、未だその力を発揮できたものはおらん。それと、創世の巫女の血族は皆一様にとある身体的特徴を持っておる」
未来はその言葉を聴いて少し反応した。あまり言いたくないことらしい。霊夢は追求しないわよ、と言う。
「すみません・・・」
「いいわよ。――――それより、何が面白いのよ」
霊夢の質問に水妖妃はにやりと笑う。
「博麗の巫女、守矢の巫女、そして創世の巫女。――――今、現代にこの三人の巫女が揃ったということじゃ。きっと面白いことが起こるに決まっておるではないか」
楽しみじゃな、水妖妃の言葉に二人は顔を見合わせる。その瞬間、霊夢は何か自分の異変に気がつく。そしてすぐさま視線を外した。
「――――な、なんなのよ・・・」
「どうか、しましたか？」
心配そうに未来が霊夢を見つめる。霊夢は大丈夫だから、と未来から距離を取った。水妖妃がニヤニヤ笑っている。
「これも、創世の巫女の力じゃな」
呟いて、二人を見る。結界を操る巫女、奇跡を起こす巫女、そして世界を作る巫女。この三人が揃った幻想郷で、一体何が起こるのか。それを全て知っているかのように、彼女はにやりと笑う。
「時代は変わるぞ。いいほうにも、悪いほうにも、な」

第二章・三人目の巫女　／了

第三章・冥界の桜　序章

冥界に桜咲く！？　五大妖幻想入り！

先日、幻想郷入りされた五大妖の一人、水妖妃さまの情報を受けて、私は冥界を訪れた。まず驚かされたのは冥界の桜が満開に咲き誇っていたことだ。西行妖は永遠に咲くことがないという噂の桜。そんなものが満開に咲いていてのだろうか。

調査したところ、咲いている桜は白玉楼のものではなく、外の世界の冥界にあるはずの万年桜と呼ばれる桜であることが判明した。やはり水妖妃さまの情報は正しかった。私はさらに冥界のことについて調査した。万年桜は五大妖の一人である霊冥姫さまが幻想郷入りした際に冥界にやってきたもので、それに伴って外の世界の冥界は幻想郷の冥界と融合し、本来の姿を取り戻したと白玉楼の主、西行寺幽々子は語る。その傍らには、その万年桜の持ち主である桜花亭の主、桜妖怪の桜さまもいた。これからは冥界も賑やかになりそうである。

射命丸文の取材レポートより抜粋

東方漫遊記

～現代妖が幻想入り2

第三話・冥界の桜

ある日の昼下がり、博麗霊夢は母屋でのんびりしていた。今日は雨、海の家もお休みである。久しぶりのゆったりとした時間に、霊夢はついため息が漏れる。駆け抜けるような忙しい日々を過ごしてきたこの夏のたった一日の休息は、霊夢を退屈させるのには十分すぎるほど長い時間だ。何をするわけでもなく時間を無駄に過ごす。そのことの大切さと贅沢さを、改めて感じている。

しかし、その一方で霊夢は悩みを抱えている。人には言えない悩みだ。萃香は分かっているようで、あえて何も聞いてこない。そして、何も知らない魔理沙や双成ミキに至っては、彼女が悩みを抱えているということも知らない。

水妖妃と初めて出会ったあの日から色々あって、ミキは魔法の森にある智魅の家に住んでいる。たまに遊びに来るのだが、その度に何か言いたそうで言えないような妙な雰囲気を漂わせる。霊夢は妙に感情をかき回される彼女の魔力めいた力を恐れているのか、それが何であるかなんて聞かないし、聞けなかった。聞いたら、何か越えてはいけない一線を越えてしまいそうな気がするのだ。ただでさえ、妖しの境界なんていう怪しげなものを越えているのだ。これ以上、面倒ごとに関わるのはごめんである。

「霊夢、雨、止んだみたいだよ」

萃香が家に戻ってくるなりそう言う。びしょぬれになった彼女は一体どこで遊んでいたのか、霊夢はタオルを持ってくると、萃香に渡す。

「一体どこで遊んでたのよ。傘も差さずに」
「いやあ、外の世界の雨雲をこっちに萃めてたんだ」
向こうは雨が多いって話を紫から聞いたからさ、ちょっとでも農家の人の助けになればいいって思って。なんだ、萃香にしてはいいことをしていたのか。霊夢は安心する。
「そういえば、あんたって里の人間と仲いいわよね」
「まあね。睦月や高野もいるし。それに、私はかわいいから。少なくとも霊夢よりは里の人間と親しくしてるよ」
「自分で言うなよ・・・」
それより、いいのは見つかったかい、と萃香は言う。
「私が萃めてやってもいいんだよ？　どんなのでもいいなら」
「お断りよ。私だって趣味があるわ。――それに、これは大事な問題だから、私が決めたいの」
もう少し考えさせて。霊夢が言うと、彼女は言う。
「用意が出来ても、それから時間がかかるんだ。――それまでの間にタイムリミットが過ぎたら、それで皆お終いなんだよ？」
「分かってる。――分かってるけど」
霊夢も普段はそんな雰囲気を微塵も感じさせないが、人間の子なのだ。萃香は分かっている。この子は、一人で持ちきれない荷物を抱えて、孤独に何をしようというのか。萃香は濡れた体のまま霊夢を抱き寄せる。
「霊夢は強いよ。でも、霊夢は人間なんだ。一人の、女の子なんだ。――辛い時は頼ってよ。私は、霊夢のためならなんだってする。この命だって惜しくはない。――霊夢は私の恩人だ。だから、少しは私にも恩返しさせてくれ」
鬼は恩を忘れるような薄情者じゃないんだ。萃香は言うが、そうね、と霊夢は軽く返す。
「大丈夫よ。私は」
晴れたみたいだし、ちょっと出かけてくるわ、と霊夢は萃香から離れると外に出て行く。萃香は霊夢の姿を無表情のままじっと見て

いた。

第三章・冥界の桜　創世の巫女と花火大会

「さて、と。大体は分かったわよ。やはり創世の巫女は紛れもない妖ね。――――それも、恐らく超希少種よ」

ミキの事をあらかた調べ終えたパチュリーは隣で本を読んでいた智魅にレポートを渡してくる。それに目を通すと、智魅はやはり私の記憶に間違いはなかったようね、と言う。

「古来より創世の巫女は人間として生きてきた。しかし、実際は違う。あれの正体は妖怪。しかも、私たちと互角以上に渡り合える才能を秘めた、ね」

パチュリーは恐ろしいものよ、と呟く。

「伝説上の生き物だって聞いていたけど、まさか、本当に実在していたなんて・・・」

「あら、その昔、外の世界には彼女と同じ種族の子がいたわよ。でも、その子は外の世界に絶望して、別の世界に逃げてしまった」

あの子も創世の巫女と同じように、類稀なる力を持っていたわ。

「確か、あの子は――――そう、如月雌雄。巫女と同じ、ツインヒューマと呼ばれる妖怪」

一人にして陰と陽の二つの性を持ち、あらゆる生命を超越した完全体。生命の常識を凌駕し、世界そのものの根源につながるといわれる力を持った存在であると噂される。

そんな化け物が、どうしてこの幻想郷にやってきたのか。根源につながる能力を持っている以上、その力はほぼ無尽蔵だ。智魅や水妖妃のように妖怪として生きて戦ってきたのならともかくとして、人間として生き、そして戦うこともない彼女がどうして来てしまったのか。何かの手違いか、それとも紫が呼んだのか。どちらにしても、いいことではない。無法妖怪の取り締まりを強化している昨今でも、未だスペルカードを用いず人間を襲う妖がいるのだ。未だかつてない治安の悪さに加えて、五大妖の幻想郷入り、そして正体は

妖であるという創世の巫女。彼らの幻想郷での立場を巡り、動き出すものがいるかもしれない。智魅は嫌な予感を感じていた。それはパチュリーも同じことだ。紫が危惧したこと、そして幽々子の警告が頭によみがえる。

「大きな戦いが、起こるかもしれないわね」

「ええ。――――そうなれば、あなたたちも無事じゃすまないわよ」

主のいないこの館は、大丈夫なのかしら。智魅の言葉にパチュリーはさあね、と言う。

「レミィもずいぶん意地っ張りよね。それとも、出てくるタイミングを失っているのかしら」

呆れたものだわ、と本気で呆れているパチュリー。

「まあ、何かあったら私も協力するから。何でも言いなさいね――――じゃあ、私は帰るわ」

智魅は紅魔館を後にし、そのままままっすぐ魔法の森に帰る、はずだった。その途中で、五大妖にさえ出会わなければ。

「あら、智魅じゃないの。久しぶりね」

「げ、桜・・・あなた、幻想郷に来てたの？」

たまたま帰り道で出くわした桜。世間話を少しして、そのままなぜか冥界まで引っ張られる。智魅は早く帰りたかったのだが、積もる話もあるからと強引に桜が彼女を引っ張った。

冥界はすっかり変わっていた。ただ広くなっただけではなく、なんと桜の桜花亭までもが幻想郷入りしているのだ。一体どういうことかは分からないが、これでは外の世界の冥界はどうなってしまっているのだろうか。

桜が言うには、冥界としての役割は果たしているらしい。そして幻想郷の冥界の役割も果たしているのだと言う。吸収合併のようなものだと桜は笑っていた。

「まさか本体の冥界が幻想郷の冥界に引き込まれるようなことがあるとは思わなかったけどね。ま、なっちゃったものはしょうがないわ。これからは幻想郷から、向こうの魂の管理を行うわ」

桜はまた正宗丸に会えてよかったわ、と言う。お茶を持ってきた正宗丸は私もです、と笑顔で言う。これで妖夢も一安心だろう、と智魅は笑っていた。
「それで、どうして私をここへ呼んだのかしら？」
「――何の話かしら？」
「意味もなく私をここまで引っ張ってきたわけじゃないでしょう？」
その言葉に、鋭いわね、と桜は言う。
「花火大会でもどうかしら、と思ってね」
万年桜を見てちょうだい、と桜は言う。智魅は万年桜を見る。なにやら雰囲気がいつもと違っていた。一体どうして、と彼女が訊ねると桜は、万年桜はまだ起動状態じゃないのよと答える。桜は立ち上がり廊下に出て万年桜を見上げた。
「魂を引き寄せる力を起動するとね、幻想郷の冥界で転生を待っている魂まで引き寄せてしまうの。現在は私の霊冥蝶で魂を管理しているけど、実は今日、新しい万年桜を起動することになっているのよ。私が改良したこれを使えば、万年桜は魂のあり方を選別して引き寄せるようになるの」
すごく大変だったけど、これでようやく楽が出来るわ、と桜が言うのだが、智魅はそれがどうして花火大会になるのよ、と質問する。
「ふふっ、まあ、楽しみにしていなさいよ。すごくきれいな花火が上がるんだから、お友達も連れて、宴会でもやりましょうよ」
智魅はじゃあ、仲間を集めてくるわ、と瞬間移動する。やってきたのは博麗神社。霊夢が来ればそれなりに人数は集まるだろう。しかし、神社には霊夢の姿はなく、代わりに睦月と萃香がいた。
「お、智魅。――どうしたんだ？」
睦月はそう言いながら智魅のほうにやってくる。
「花火大会のお誘いよ。――冥界の桜花亭で」
「へえ、楽しそうだね。――萃香様、どうします？」
「酒が出るなら行くよ。――まあ、無くても行くけど」
しゃっくりしながら萃香は言う。そして、ふらふら智魅のほうに

やってきて、そして言う。
「大切な話がある。――――祭りの後で話そうか」
萃香はすぐに母屋に戻った。智魅は萃香の妙な雰囲気に気づいたのか、黙ったまま、姿を消す。
それからあちこち回ってさまざまな妖怪たちに声をかけた。その途中、たまたま訪れた香霖堂で妙な話を聞く。店主の森近霖之助は困ったもんだよ、と智魅に話し始める。
「さっき、霊夢が妙な話をしてきてね。博麗の巫女の力を弱めるにはどうすればいいとか・・・。一体、何をするつもりなんだか」
「巫女の力を弱める、って」
「まあ、専門分野ではないけどね。半妖しかり、博麗の巫女の力は人間としての能力だから、人間の血を薄めれば少しは弱くなるんじゃないかと答えたら、妙に納得して帰っていったよ」
どうしてそんなことを聞いたのかしら、智魅が言う。
「自分の力を弱めるつもり？　そんなことをすれば博麗大結界がどうなってしまうか分かっているのかしら？」
「分かっているとは思うよ。あの子は自分の役割をよく理解しているからね。――――まあ、思うところは分かるよ」
「どういう意味？」
「あの子も普通の人間だということさ。――――妖怪であるあなたには少し理解しがたいことかもしれないな」
宴会の誘いはすぐに断られた。今日は約束があるのだと言う。智魅は一通り幻想郷の妖怪たちを誘い終えて、最後に自分の家に帰る。ただいま、とドアを開けると、双成未来は何か焦ったように何かを隠してお帰りなさい、と返事する。
「なにしてたの？」
「え、いえ・・・。何もしてませんよ？」
妙な雰囲気に、智魅は何かに気づいたが、まあ、別に気にするようなことじゃない、と椅子に座った。
「今日、冥界で花火大会があるそうよ。一緒に行きましょう」

「え？　あ、でも・・・私は」
「いいじゃないの。お祭りごとには参加しないと」
その言葉に、渋々ミキは頷いた。どうもこういうことに乗り気じゃない性格らしい、あまり幻想郷に向いていない性格のようだ。
「とりあえず、日没まで時間もあることだし、博麗神社に行きましょうか？」
「は、博麗神社、ですか・・・？」
「何よ、あなた霊夢と友達でしょう？」
「いや、そうなんですけどね・・・」
なんとなく向こうが避けているような気がして。ミキの言葉に智魅は笑う。
「それはあなたの種族の特性だから仕方ないわよ」
「私の種族って・・・智魅さん、私の体のこと、知ってるんですか？」
「昔ね、あなたと同じ子がいたのよ。あの子も同じように悩んでいたわ。でも、その力があるからって心を閉ざしてはいけないと言っていたわ。逆にその力を利用して、自分の好きなように生きればいいと」
人ではない以上、人には出来ないことが出来る。それを楽しむことが人間ではないものの特権なんだ、そう言っていたわ。智魅の言葉を聴き、ミキは頷く。
「でも、実際いいことはないですよ」
「そりゃそうでしょうけど・・・それでも、少しは前向きに考えなさいよってこと」
本当はそれが正しいんでしょうね、ミキはため息一つ、呟いた。暗い雰囲気に耐えられないのか、智魅はミキと一緒に博麗神社にワープする。神社には用事から帰ってきた霊夢がいた。霊夢はミキを見るや否や頬を赤らめて視線を外す。
「あ、あら。智魅じゃない。――――何か用かしら？」
「分かりやすすぎるわよ、霊夢」

ミキも恥ずかしそうに俯いて挨拶する。
「こんにちは、霊夢さん」
「よく来たわね。ミキ・・・。さ、あがってよ」
二人はやはりどこかおかしい。ツインヒューマの特性にすっかりやられてしまっている霊夢とそれを意識しすぎているミキ。そろそろネタばらしが必要かしらと智魅は笑う。

第三章・冥界の桜　宴会の始まり

「霊夢。ミキのこと好きかしら？」
「なっ、何を言ってるのよ！」
「大丈夫よ。それは彼女の生まれ持った特殊能力だから。幻想郷風に言うなら『人の性的欲求を煽る程度の能力』ってところかしら」
「せいてき、欲求？」
「そう。彼女の種族、ツインヒューマの特徴ね。恋心ってのは究極まで突き詰めると、つまるところ性的な欲求。要するに、あなたはこの子に性的欲求をくすぐられてそれを恋と勘違いしているのよ」
霊夢はあっけに取られた表情でミキを見つめる。そうなんです、と彼女は事実を認めて霊夢に謝罪した。
「な、何よ・・・。そういうことだったのね」
呆れるわ、と霊夢は深いため息をつく。
「この子の力は特別強いようで、自分じゃ押さえがきかないのよ。多分、人間は彼女を見たら皆同じように彼女のことを好きになるでしょうね。だから、私の家に住ませているのよ」
里じゃこの能力は危険すぎるからね。智魅は笑ってミキを見た。彼女は寂しそうに俯き、霊夢にもう一度謝った。
「ま、人間じゃないっていうなら話は別よね。――――若いんだから、能力の押さえが利かないってだけのことでしょう？　だったら別に気にすることじゃないわよ。いずれちゃんとできるようになるわ。――――まあ、人に迷惑をかけるようなら、私が退治するけど」
霊夢はそう言ってミキに微笑みかける。感情の正体が知れれば霊夢も怖くはなくなったのか、雰囲気がいつもの博麗霊夢に戻っていた。それを見て、ミキは言う。
「こんな私で、いいんですか？」
「なに言ってるのよ。そういうのに良いも悪いもないわよ。あなたはあなたじゃない」

その言葉を聴いて、ミキも安心したのか笑顔になった。しかし霊夢はそれを見て視線を外す。
「やっぱずるいわその能力」
「す、すみません・・・」
そんな話をしながら、しばらく時間を潰す。そして夜。智魅はそろそろ行きましょうか、と立ち上がった。
「行くって、どこに？」
「ああ、霊夢には言ってなかったわね。冥界で花火大会があるのよ」
「あのお盆の幽々子のやつみたいなのかしら？」
「ああ、お盆の魂送りね。――――あれとはちょっと違うかしら」
まあ、ついてくれば分かるわよ、と智魅は二人を連れて瞬間移動する。次の瞬間には、もう冥界の桜花亭に到着していた。巨大な桜が咲いているのを見て、霊夢はぎょっとするが、すぐに西行妖ではないと気づき、安心する。じゃあ、アレは一体誰の桜だ。そう考えた瞬間、後ろから声をかけられる。
「あれは万年桜。永遠に枯れることのない、私の桜よ」
黒髪の女性はそう言って博麗霊夢に微笑みかける。幽々子のような穏やかさに、フランドールのような不安定さをかもし出す、妙な雰囲気の女性だ。長く生きた妖怪とは思えない落ち着きのないその様子に霊夢は少し恐怖する。
「大丈夫よ、霊夢。――――彼女は五大妖の桜。外の世界の冥界を管理していた妖よ」
「あなたの話は幽々子から聞いたわ。人間なのに幽々子を倒したことがあるそうね。すごいじゃない。今日はたくさんご馳走を用意したから、楽しんでいってね」
桜は楽しそうに万年桜のほうに向かっていく。霊夢たちは正宗丸に案内されて部屋の中に入った。桜花亭の宴会場はすでに幻想郷の妖怪たちの酒盛りが始まっている。
「おお、霊夢！　こっちこっち！」
魔理沙は既に上機嫌。隣で呆れているアリスをどかして霊夢を横

に座らせた。霊夢は酒臭い魔理沙を見てもう酔ってるの？　と呆れ笑い。
「魔理沙ったら、来て早々、萃香と飲み比べなんかしたのよ」
アリスはそう言って魔理沙を睨む。どうやら酔っ払いは彼女に任せておけば大丈夫だろう。霊夢は魔理沙を適当に受け流してそこから少し離れたところに居るパチュリーに挨拶した。
「レミリアは？」
「まだ帰ってこないのよ。いい加減にしないと妹様の当主ごっこが終わらなくて大変なのに」
流星電波と戦い、湖に落下したレミリア。あれ以降、彼女の姿を見たものはいない。未だに妖精メイドたちを使ってあちこち探させているらしいのだが、一つの目撃情報も見つからないのだ。こうなってくると、さすがに死んだのではないかとも思えてくる。しかし、紅魔館の面々も、霊夢も彼女が死んだとは思えないのだ。なにせ殺したって死ななそうな幼女なのだ。どこかでこっそり隠れてたのは良いものの、出てくるタイミングが分からなくなっていると考えるほうが正しい。
「ま、いずれ出てくるか、誰かが見つけ出すでしょう」
「見つけたらお仕置きされるから、出て来れないのかもしれないわよ」
霊夢は笑って次の席に向かう。東風谷早苗は諏訪子と一緒に八雲家の皆と飲んでいた。そこに割って入り、紫によ、と挨拶する。
「最近顔出さないから、死んだのかと思ったわよ」
「私が死ぬものですか。――――相変わらず、変わらないわね」
「まあね、人間そうそう変わるもんじゃないわよ」
早苗は二人を見て相変わらず仲が良いですね、と言うが、そこは霊夢に否定される。
「こんな妖怪と仲が良くていいことなんかないわよ」
「あら、私と一線越えた仲じゃないの」
「誤解されるような言い方するんじゃないわよ！　あれは、隕石を

止めるために仕方なくやったんじゃない！！」
「ああ、妖しの境界ですか。――私もやってみたいです、あれ」
やめといたほうが良いよ。諏訪子が言う。
「越えたら戻れないから境界なんだ。紫、あんたなら分かるだろう？」
「そうね。生と死の境界が一番わかりやすいかしら？　一回死んだものは基本的に蘇ることはできない。それは、生と死の境界線を越えてしまったから、もう二度と生には戻れないということ」
人とそうでないものの境界線を越えたら、もう二度と人間には戻れないわ。あなたが思っている以上に単純なものじゃないのよ。紫の言葉に、早苗はすみません、と謝る。別に謝ることじゃないわ、と紫。
「誰だって強くなりたいものね。ライバルがあんな簡単に強くなられちゃ、あなたも焦るでしょ」
誰がライバルか。霊夢は紫に言う。
「それはそうと、紫。本当に大丈夫なの？」
「何が？」
「あなたが神社に顔を出さなくなってからしばらく経ってるから。もしかして、何か異変でもたくらんでるんじゃないでしょうね」
「まさか。異変を起こす気があるなら、こんな場所に来ないわよ」
それもそうだ。そんな話をしている間に藍がグラスと酒を持ってきた。霊夢に渡して酒を注ぐ。霊夢はじゃあ、と笑う。
「最後の思い出に」
「乾杯」
紫と霊夢は乾杯し、二人で一気に飲み干した。

第三章・冥界の桜　告白

それからしばらくして、メインイベントが始まった。万年桜の下に、用意されたパーティ会場に皆がやってくると、桜が丁寧にお辞儀する。

「お初にお目にかかります。幻想郷の皆様。私、五大妖が一人、桜妖怪の桜と申します。――――本日は、新たに完成しました万年桜の完成披露式典にご足労いただき、ありがとうございます」

そんな名目だったのね、と霊夢はいまさらながらに言う。

「それでは、皆様、ご自由にお楽しみください」

刹那、桜の花びらが風に乗り、万年桜の周囲を舞う。そして淡く桜色に光り始めた万年桜は、ゆっくりと、魂を吸い寄せる。

「――――すごいわね。これが万年桜」

魂と桜の花が共鳴し、花びらに乗った魂のエネルギーが魂とぶつかり弾け、光り輝く。エネルギーは再び桜に戻り、そしてまた同じように光を灯す。無限に続くまさに魂の花火だ。

そうして宴会は始まった。呑み笑い、ある者は歌い、ある者は踊り、ある者は弾幕ごっこをし、楽しい時間は過ぎていく。そして夜も更けて、宴会はお開きになる。だが、一部の者たちは桜花亭で未だに終わらない花火を見ていた。

「これ、終わらないんですか？」

「ええ。万年桜は現世にとどまる魂を管理するシステムですので、止まることなく動き続けます」

正宗丸はそう言って、縁側で眠っている魔理沙に毛布をかけた。鈴仙は本当にすごいです、と興味心身に万年桜を見上げている。隣で同じように桜を見ている霊夢とミキ。ミキの手にはアリスからもらった上海人形が握られている。アリスも人形を気に入ってくれて嬉しいのか、上機嫌で奥の部屋でパチュリーと話していた。

早苗と妖夢が皆にお茶を持ってくる。早苗からお茶を受け取ると、

不意に霊夢は話を切り出した。
「みんな、聞いて欲しいことがあるの」
深刻そうな声に、らしくないわね、とパチュリーが言う。
「どんな時でもへらへらしているあなたが、こんな場所で空気も読めないのかしら？」
言うなら後になさい。彼女の言葉に、それじゃダメなの、と霊夢は呟く。
「今を逃したら、もう二度と、言えないかもしれない」
その言葉に、何かあったんですか、と鈴仙が真剣に問う。
空気が変わったことに、魔理沙は気づいていた。目は開けずに、耳だけ霊夢のほうに向けて話を待つ。そして、霊夢は覚悟を決めて皆に打ち明けた。
「私ね。もうすぐ死ぬの」
え、と皆が一様に疑問を抱く。しかしパチュリーは落ち着いていた。
「今までの博麗の巫女の中で、一番力を浪費してるもの。短命なのは当然ね」
どういうことよ、アリスがパチュリーに問いかける。魔法使いなのにそんなことも知らないのかしら、彼女はアリスに言う。
「魔法だって無限じゃないでしょう？　魔力がなくちゃ魔法は使えない。じゃあ、博麗の巫女の結界はどこでどうやって作られているのかしら？」
その言葉に鈴仙は気づく。
「まさか、自分の命を削って・・・？」
「そうよ。博麗の巫女の力は自分の命を削って作られる。博麗大結界なんてたいそうなものを使っているのに、異変解決や、あなたたちとの弾幕ごっこ。そりゃ、先代よりも早く死んで当たり前よ」
「そんな、嘘でしょ？」
「いいえ。本当の話よ。力も体もかなり弱ってきてる。それに、先代の巫女――母の最後に似ているの。今の私は」

妖怪退治の本能は博麗の宿命のようなもの。それが衰えている。
「ミキの正体に気がつかなかったのなんていい例ね。妖怪退治の力が鈍ってきているの。――――もって後一年か、それより早く」
早苗は黙ったまま霊夢を見ていた。魔理沙も動かずに狸寝入りを続けている。そんな中で、パチュリーは良く打ち明けられたわね、と霊夢をほめる。
「先代は何も言わずに逝ってしまったから、あなたもそうするんじゃないかって思ってたわよ」
「母が？　――――っていうか、あなた母のこと知ってるの？」
「小さい頃からね。あなたの母は、よく図書館に遊びに来てたわ」
博麗の巫女なのに妖怪を見ても退治しない、それどころか人と何も変わらないじゃないと、妖怪と仲良くする。時代が変わったと思ったわ。パチュリーは懐かしそうに霊夢を見て、あなたは彼女に良く似ている、と微笑む。
「でも、後継の巫女がいないんじゃ。幻想郷もおしまいね」
パチュリーは残念そうに言うとそこが問題なのよ、と霊夢。
「急いで結婚して、子供作らなきゃいけないの。ねえ、誰かいい人知らない？　お金持ちで優しくて、子供の面倒見てくれる人」
バカじゃないですかと妖夢が言う。妖夢は涙目で霊夢に抱きついた。
「今、そんな話する時じゃないでしょう・・・。どうして、あなたはそう、いつも人の気も知らないで」
「ごめん、妖夢。――――でもね、もう決まっていることなの」
人の死は覆らない。人が人である限り、その運命には抗うことはできない。霊夢はそれを知っているから、せめて明るく振舞いたいのだ。
「すぐに死ぬわけじゃないんだし。ね」
「霊夢・・・さん」
不意に、ミキが霊夢の手を握る。
「霊夢さん、あの・・・その」

しかし、ミキは言い出せず、手を離してしまう。霊夢は立ち上がり、この話はおしまいね、と手を叩いた。
「ちょっとお手洗い行ってくるから」
彼女は縁側を歩いて行ってしまう。残された一同は、皆黙っていた。だが、不意に早苗が口を開く。
「寂しくなりますね」
「そうね・・・でも、いつか来ることだもの」
パチュリーは言う。それが少し早かっただけのこと。仕方のないことよ、その言葉を聞き、鈴仙は黙ったままどこかに行ってしまう。
「皆、自分を残して逝ってしまう。これも妖怪の宿命よ、アリス」
パチュリーはアリスに言う。そうね、と彼女も頷いた。
そして、霊夢は一人、桜花亭の離れで泣いていた。そこに、智魅がやってくる。
「皆にちゃんと打ち明けられたのね。偉いわ」
「何よ・・・あんた、知ってたの？」
「私に知らないことなんてないわよ。それに、さっき萃香に頼まれちゃってね」
「萃香に？」
「あなたが死んだ後の博麗大結界の管理。あなたが困るだろうからって。安心しなさい、私が責任を持って引き継ぐし、あなたの子供に博麗の巫女の責務を押し付ける真似もしないから」
「――――どうして、それを？」
「香霖堂さんに聞いてたでしょう？　博麗の巫女の血を薄める方法を。自分の子供に重い責任を背負わせたくない気持ちは分かるわ。博麗の巫女の仕事は別の誰かにやってもらうから大丈夫よ。将来、あなたの子が巫女になりたいって言い出したら話は別だけど」
だから安心しなさいな。智魅の言葉に、霊夢はありがとう、と笑う。
「でもね霊夢。その前に一つだけ、やらなくちゃいけないことがある」

「――異変、ね」
予兆はある。紫だって霊夢の寿命のことは知っているはず。だからこそ、紫は霊夢に異変が起こるということを知られたくないのだ。
「名づけるなら、そうね・・・『無法異変』かしら。妖怪の山を中心に活動していた無法妖怪が、ついに指導者を見つけたようよ。その指導者は五大妖の一人、人形師『要由里香』――数年前に消滅した『呪縛王』に代わり五大妖になった魔法使い」
でも、あなたの敵は彼女じゃない。智魅は言う。
「あなたに倒して欲しいのは、要由里香に操られた吸血鬼、レミリア・スカーレットよ」
「レミリアが？　どうしてそんなのに操られているのよ」
「流星異変の後、どうやら無法妖怪によって回収されていたみたいね。それで、要由里香の手によって、操られた」
彼女を救い出して欲しい。智魅の言葉に、霊夢はいいわ、と笑う。
「最後の異変だもの。いっちょ派手にやりましょうか」

第三章・冥界の桜／了

第四章・御阿礼の子　序章

九代目阿礼乙女、最後の時。

幻想郷縁起で知られる九代目阿礼乙女、稗田阿求が先日未明、責務を全うし、この世を去った。稗田家の御阿礼の子は、日本文学の始まりを成した稗田阿礼の血を引く家系であり、御阿礼の子は転生により先代以前の記憶を継承して幻想郷の歴史を記録するという役目を持つ。彼女もまた、幻想郷縁起の九冊目を完成させ、役目を果たした直後に病を患い、眠るように亡くなったという。

百年単位を目処に生まれてくる御阿礼の子。次に現世に生まれるのは百数年後。人間には再会は難しいが、妖怪は次代の御阿礼の子と、新たなる幻想郷縁起に期待したい。

とある天狗の取材メモより抜粋・上部に赤字で没と書かれていた

東方漫遊記

～現代妖が幻想入り2

第三章・御阿礼の子

幻想郷縁起が完成したと聞きつけたパチュリーは早速、お供の小悪魔を連れて稗田家にやって来た。幻想郷縁起は人間や妖怪にも読まれている幻想郷の妖怪図鑑兼ガイドブックだ。最新の幻想郷縁起を早く読もうと稗田家の屋敷は多くの人でにぎわっている。パチュリーは人ごみに紛れるのが嫌で、小悪魔を代わりに送り込み、自分は屋敷の前の茶店で団子を食べていた。

「全く、そんなに珍しいものかしら・・・」

別に珍しくはないですよね、隣に座った女性が言う。あなたが言うなよ、とパチュリーは彼女――稗田阿求につっこんだ。

「お疲れ様。――今回は大変だったでしょう？」

「そうですね。色々と新しい試みもしましたし。それに、新しい妖怪がたくさんいて、まとめるのに時間がかかりましたよ」

律義な彼女のことだ。現代妖のことも全部まとめていたからここまで時間がかかったのだろう。智魅たちの幻想郷入りがなければ本来はもっと早く幻想郷縁起を完成させることができただろうに。パチュリーはニヤニヤ笑って、難儀な性格してるわよね、と言う。そうですね、と阿求も苦笑い。

「それで、これからどうするの？　私たちでよかったら、いくらでも付き合うわよ」

幻想郷縁起をまとめ終えた御阿礼の子はその後、自由にしていられる時間がある。阿求もようやく自分の仕事を終えたのだ。これからは自由に遊んでもいいのである。だが、阿求はごめんなさい、と言う。

「今回の幻想郷縁起は少し時間がかかりすぎました。おかげで、もうそんなに時間が残されていないんです」

「――そう」

寂しげな阿求。パチュリーは不意に博麗霊夢には会った？　と訊ねてくる。

「霊夢さんですか？　いえ、最近は」
「じゃあ、お別れを言いにいかないとね」
ようやく小悪魔が人ごみから抜け出てくる。ちょうど団子を食べ終えたパチュリーは立ち上がり、阿求に告げる。
「あの子も、もう長くないのよ」
分かるでしょう。そうですね、と阿求は返す。御阿礼の子である阿求は記憶を継承し、博麗の巫女のことも良く知っている。巫女たちが一体どういう結末を迎えているのかも。
「分かりました。会いに、行ってきます」

第四章・御阿礼の子　逝くものたちと残されるものたち

ごめんください、と母屋で言っても神社の境内を探しても、博麗霊夢の姿はない。海の家の仕事は午後からだと聞いていたから、今は神社にいるはずなのだが、阿求は悩み、そして最後の手段を使った。

神社の賽銭箱に小銭を投げ入れる。ちゃりん、と音がしたその刹那に、博麗霊夢は飛び出してくる。

「あら、阿求じゃない。久しぶりね」

「相変わらずですね。霊夢さん・・・」

呆れ笑いする阿求に何のことかしらとごまかす霊夢。

「今、蔵の掃除をしていたのよ。もう変なものばっかりで」

これ見てよ、と霊夢の顔をした気味の悪いぬいぐるみを阿求に見せる。一体誰が作ったんだか、と呆れていた。

「まあ、せっかく来たんだし、お茶でも飲んでいきなさいよ」

母屋に阿求を連れて行くと、霊夢はすぐにお茶とお茶菓子を持ってきた。

「今日はとっておきの羊羹があるのよ。萃香は出かけてるから、一緒に食べちゃいましょう」

そんなことを聞いていたのかいないのか、光の速さでやってくる魔女が一人。勢いよく着地すると、縁側に身を乗り出して彼女は笑う。

「阿求、幻想郷縁起くれ」

「あの・・・ここにはありませんよ」

なんだよ、並ばずに手に入ると思ったのに、と魔理沙は残念そうに居間に上がりこんだ。

「お、羊羹じゃないか」

「あげないわよ。これはお客様用のとっておきなんだから」

「何だよ。じゃあ、私は客じゃないってのか」

「お昼目当てにやってくる魔法使いは、客として認めないわよ」

私は人間だぜ、と魔理沙はニヤニヤ笑っている。
「おお、そうだ。阿求、幻想郷縁起は完成したんだろ？　これから遊びに行かないか？」
思い出したかのように魔理沙は言う。幻想郷に海ができたんだぜ、といまさらな話を阿求にする。
「これから行くんだが、一緒に行くか？」
「そうですね・・・。せっかくだし、そうしましょうか」
阿求は笑顔で言う。あんまり無茶させたらダメよ、と霊夢は魔理沙に注意する。分かってるって、と適当に言いながら霊夢の羊羹に手を伸ばした。
「夢想封印・微」
超小型の夢想封印が魔理沙の指先に当たる。魔理沙は思わず手を引っ込めた。
「いった・・・。お前な、こんなことに能力使うなよ」
「自分の力をどう使おうと私の勝手よ」
ほら、行くんならとっとと行きなさいよ、と霊夢は魔理沙にしっし、と手を振る。私の箒に乗るか、と阿求を誘い、二人は箒に乗って空を飛んだ。それを見送った霊夢はため息一つ、そしてその後うなだれるように床に寝転がった。
「全く、あんな程度で疲れるなんて・・・こんなので本当にレミリアに勝てるのかしら」
自分で自分が情けない。霊夢はもう一度深いため息をつくのだった。
箒に乗ってから数分もしないうちに海にたどり着く。海の家で水着を借りて着替えると、早速海に向かって走る。元気な人だ、と阿求は笑っていた。阿求は砂浜で魔理沙が遊んでいるのを見ている。すると彼女に声をかけてくる一人の少女。半霊を携えたその子は魂魄妖夢。帽子を被り、薄手の長袖シャツを羽織り、その下は水着姿。ホイッスルを首からぶら下げている。どうやら監視員をしているらしい。

「稗田家の方ですよね。お久しぶりです」
「妖夢、さんでしたよね。一年ぶりくらいですか」
幻想郷縁起、完成おめでとうございます、と妖夢は言う。これでようやくのんびりできますね、と続けるが、阿求は少し寂しげにそうですね、と言う。
「どうかしたんですか？」
「いえ。――この時期になると、少し寂しくなるんです」
阿求は語る。自分の存在意義は幻想郷縁起の完成のみにあると。それさえ完成してしまえば、あとは死ぬだけ。役目を果たした御阿礼の子は長生きすることもなく、死を迎える。そして、またしばらくして再び幻想郷縁起を作るために転生する。ただそれだけなのだ。
「他の御阿礼の子もそうでした。役目を果たしたら後はもう自由にしていいと言われるんです。でも、それって役目を終えたからもう用済みだって言われているような気がして、寂しくなるんです」
そんなことないですよ、と妖夢は言う。
「阿求さんは阿求さんじゃないですか。御阿礼の子なんて関係ないですよ。――これからは自分の好きなことをしていいってことなんです。稗田阿求の人生はここから始まるんですよ」
「でも、もうそんなに時間は残されていません」
後、数日もしないうちに、私は死にます。阿求の言葉が、霊夢の言葉と重なる。妖夢はどうして、と呟く。
「どうして死にゆくものは、そんなに諦めがいいんでしょうかね」
「妖夢さん？」
「残された時間は残り少なくても、それはあなたの人生です。その限られた時間の中で、精一杯何かをしようとか、何か大きなことを成し遂げようとか、そう思わないんですか？」
「――きっと無理だからですよ」
そんな希望を持っていても、寿命には抗えないんです。阿求は言う。
「病気で体が弱っているなら、それでいいのかもしれません。でも、

寿命は違います。昨日はあんなに元気だったのに、その日になったら急に動かなくなるんです。生きる希望があっても、望みがあっても関係ないんです」
「でも、そんなの、寂しすぎるじゃないですか・・・」
「それでいいんですよ、死にいくものは残されるものとは違って特別なものは何も欲しくないんです。———ただ、そこにある今が、大切な宝物なんですから」
ね、と阿求は妖夢に微笑みかける。妖夢はそうですか、と呟き、笑顔になる。
「私のような半人半霊には少し難しい話です」
永遠に近い時を生きる彼女らにはその感情はきっと理解できるものではない。阿求もそれを知っているのか、気にしないでください、と微笑む。
「いつものように、送り出してくれればそれでいいんです。何も難しい頃じゃないでしょう？」
阿求はそう言って、もう一度笑っていた。

第四章・御阿礼の子　最初の物語

その日の夜、海の家は阿求の幻想郷縁起完成を祝して宴会が開かれた。呑むための口実を作っているだけでしょうが、と霊夢は呆れているが、まあいいじゃない、と智魅は言う。

「たまにはこうして集まってわいわいやるのもいいものでしょう？」

まあ、べつにいいんだけど。霊夢はそう言って今日の主役を見る。妖怪たちに囲まれて楽しそうに笑っている阿求。だが、どうにも疲れているように見えた。

「多分明日明後日の命よ。――――楽しませてあげるといいわ」

私は無法妖怪たちの動向を探りに行くわ、智魅は瞬時に姿を消してしまう。楽しませるったって、何をしたらいいものか。霊夢に思いつくようなものじゃない。そしてそのまま特に話をすることもなく、宴会はお開きになった。霊夢は眠りこけている連中を端に寄せて、片づけをしている。その最中、妖怪たちに送らせたはずの阿求が戻ってきた。忘れ物でもしたのかしら、訊ねると、彼女は言う。

「すみません。まだ霊夢さんにちゃんとお別れ言ってなかったから」

そんなこと、と霊夢は笑う。

「別にいいのに。どうせすぐに会えるわよ」

ダメです、と阿求は言う。

「霊夢さんは私の――――稗田阿求のはじめての友達だったから」

ありがとうも言わずに死ぬなんてできません。阿求の真剣な眼差しに、彼女はそう、と呟く。

「懐かしいわね。――――そうだった。あなたと始めて会ったのは」

百数年に一度といわれる御阿礼神事によって誕生した九代目阿礼乙女、稗田阿求。彼女と博麗の巫女である霊夢が出会ったのは、まだお互いに幼い頃だった。

幻想郷縁起の資料作成のためにあちこちフィールドワークに出かけていた阿求。たまたまやって来た花畑で、一人の少女を見つけた。

それが、次代の博麗の巫女となる少女。博麗霊夢だった。
阿求はそんなこと知ってか知らずか彼女に声をかけた。
「あの、ここは危険な妖怪が出るところだから、来ないほうが」
阿求の忠告に少女はどうでもいいわよ、と答える。
「もし妖怪が来ても、私がぶちのめすから」
「でも、妖怪はとても恐ろしいものたちなんですよ。人間じゃ敵わないんです」
「そんなことないわよ。だって、見た目も何も変わらないじゃない」
同じような形をしてるんだから、きっと人間と何も変わらないわよ、と霊夢は言う。でも、と阿求は俯いた。
阿求の記憶の中にある妖怪たちはどれも恐ろしい化け物ぞろい。確かに見た目は人間とさほど変わらない者たちも多いが、あの異様な雰囲気と立ち振る舞いは、人間とは一線を画す存在なのだと言うことを思い知らされる。
「――――ああ、もう分かったわよ。じゃあ向こうの川に行きましょう」
霊夢はそう言って阿求を川のほうに連れて行く。川原では数人の子供たちが遊んでいる。あの子達と一緒に遊べばいいじゃないですか、と阿求は言うのだが、霊夢はいいわよ、と適当に座り込んだ。
「遊ばないんですか？」
「見てりゃ分かるわよ」
しばらくして、子供たちが霊夢に気づく。すると、皆いそいそとどこかに行ってしまうではないか。それを見て阿求はどうして、と呟く。
「博麗の巫女は幻想郷で一番大切な人間だから近寄るなって親に言われてるのよ。――――あたしゃ妖怪かっての」
博麗の巫女は人間にとって妖怪を退治してくれる頼もしい存在だ。だが、確かに実際に人として彼女と向き合うような人間はいないのかもしれない。妖怪を退治するそれは、言ってしまえば妖怪のそれに近しいもの。そうなれば、博麗の巫女は妖怪に最も近い人間なの

だ。化け物と恐れられ、距離を置かれても仕方ないのかもしれない。
「だから、誰もいない場所に独りでいるのがいいのよ」
霊夢はそう言ってさっきの花畑に戻っていく。阿求は何もいえないまま、彼女について行った。
「ついてこなくてもいいのよ？　ここには性悪妖怪が出るんだから」
「でも・・・」
あのね。霊夢は阿求に詰め寄った。
「かわいそうだとか同情はいらないわよ。――――これは私の問題なの。それに、私は自分のこと、かわいそうだなんて思ってないし」
将来妖怪退治で大金持ちになって見返してやるんだから。霊夢の言葉に阿求は笑う。何がおかしいのよ、と霊夢は阿求の頬を抓った。そのときである。
「私の花畑に御用かしら？」
女性がいつの間にか二人のすぐ近くに立っている。髪は緑色、異様な雰囲気の女性だ。優しそうなその裏に、隠しきれないほどの力強さと鋭さを兼ね備えたその姿。まさしくあの大妖怪そのもの。
「か、かかか風見幽香！」
阿求は驚いてその場にひっくり返る。まさかいきなりこんな極悪妖怪に出くわすなんて。風見幽香と言えば幻想郷でその名を知らぬものはいない古参の妖怪。その力は幻想郷最強と名高いあの八雲紫とも並ぶほどと言われている。
「光栄ね。御阿礼の子に名前を覚えてもらっていたなんて」
彼女はそう言ってこちらに手を伸ばしてくる。捕まったら何をされるか分からない。ここは逃げなきゃ、と阿求は思うが腰が抜けて立てないではないか。これはまずい。阿求は霊夢を見る。だが、彼女は冷静そのもの、逃げるそぶり一つ見せずに彼女を見ていた。
「わ、わわあわっ、ごめんなさい！」
「あら、何を謝っているのかしら？」
幽香は阿求に手を伸ばし、彼女を抱きかかえると、そのまま地に足をつけさせる。せっかくの着物が汚れちゃうわよ、と土を払い、

幽香はにっこり微笑んだ。
「ここは妖怪の出る場所よ。こんな危ないところに子供二人で来ちゃダメじゃない」
「え・・・？」
ほら、人間の匂いを嗅ぎ付けてやってきたわよ、と幽香は向こうのほうを指差す。人食い妖怪のルーミアだ。逃げなきゃ、と呟く阿求に大丈夫よ、と幽香は言う。
「おおっ、二人も食べられる人類」
ルーミアは嬉しそうに阿求のほうに向かってくる。だが、幽香はにやりと笑って彼女を止める。
「二人は私のお客様よ。手を出したら殺すわ」
幽香の言葉にルーミアは動かなくなる。やはり、大妖怪の言葉は強いのだ。そう思った刹那。ルーミアは指先から霊力の弾丸を発射する。幽香はそれを叩き落すと、すぐさま反撃。鉄拳でルーミアをはるか遠くのほうまで吹き飛ばしたではないか。
「言っても聞かないようなのにはこれが一番ね」
さ、そろそろ暗くなるから帰りなさい。幽香はそう言いながら、安全な人間の里のすぐ近くまで送ってくれた。手を振ってお礼をいい、阿求は以外でした、と呟く。
「かなり極悪な妖怪だと聞いていたのに。すごく親切で」
「――――だから言ったでしょう？　人間と変わらないのよ」
人間も妖怪も私からすれば同じようなものよ。霊夢はそう言ってさっさと帰ろうとする。それを阿求は引き止めた。
「あのっ、よかったら、また、一緒に遊びませんか？」
あなたといたら、もっと妖怪のことが分かりそうな気がするんです。その言葉に、私も妖怪扱いしてないか？　と霊夢。
「――――来週。またここに来るから」
「――――はいっ！」
それからと言うもの、二人はよく一緒に妖怪のいる場所に出かけてはいろんな妖怪に出会った。二人の噂を聞いた一人の少女も途中

から一緒に混ざって三人で遊びに行くことも多かった。そして、時は過ぎ、霊夢は博麗の巫女を継ぎ、もう一人の少女も魔法の森で店を営んでいると言う噂だけ残して姿を消した。阿求も幻想郷縁起の編集を本格的に始めたため、家から出ることも少なくなった。それでも、たまには互いに顔を見せて、一緒に遊んだりもした。

「でも、それももうできなくなってしまうんですね」

博麗霊夢との時間。楽しかった思い出。それも皆、終わり。

気づけば阿求は泣いていた。泣くんじゃないわよ、と霊夢は笑っている。どうして彼女は笑えるんだろうと、阿求は思う。彼女も遅かれ早かれ、この日々に終わりを告げるというのに。

「霊夢さんは、強いですね」

「違うわよ。———強いんじゃない。我慢してるだけ」

本音を言うとね、私だって怖いわよ。霊夢はそう言いながら笑う。

「でも、泣いてばっかりじゃ、残りの人生楽しめないでしょう？

それこそ、後悔することになるわ。だから、必死で堪えてる」

泣くのは死んでからでも遅くないわ。その言葉に、阿求は頷く。

「だから笑っていなさい。最後の時まで」

「———はい」

第四章・御阿礼の子　不死者と賢人

それから二日後、夜遅くなって阿求は床に臥した。体がうまく動かないのだと言う。心配になって駆けつけた魔理沙は阿求の部屋に入るなり、抱えきれないほどの大量の花を阿求に見せ付けた。
「どうだ。――――幽香の花畑から取ってきた」
「ええっ、魔理沙さん、殺されますよ？」
「後で謝りに行くから問題ない」
お前のためだと言えば奴も怒らんだろ。はたしてそうだろうか、と阿求は心配になる。
「倒れたって聞いたから心配してたが、案外大丈夫そうだな？」
「ええ、まあ・・・。私自身は大丈夫だと思っているんですが」
体の方はそうでもないみたいです。彼女の言う通りのようだ。顔色はけして良好じゃないし、細い体にはもう体を起こす力も残っていない。――――これが人間の最後なのだろうか、と魔理沙は思う。
「阿求、辛くないか？」
「大丈夫ですよ。魔理沙さんの顔を見たらもうすっかり元気です」
嬉しいこと言ってくれるじゃないか。魔理沙は笑顔で言う。
「なあ、何かしたいことあるか？　会いたい奴とか連れてきてやるぞ」
魔理沙の言葉に、阿求は一つだけ、と答える。
「なんだ？」
「あの・・・博麗神社に行きたいです」
あんなトコに何の用があるんだよ、と魔理沙は言う。
「いえ。――――ただ、霊夢さんに会いたいんです」
お前ら、ガキの頃、結構仲良かったもんな、魔理沙は言う。
「三人でよく遊びましたよね。妖怪の山の川に行ってキュウリで河童を釣ったり、湖の妖精に逆に悪戯を仕掛けたり」
「ああ、そんなこともあったな」

「最後に二人と一緒にまた遊びたいんです。――――だめ、ですか？」
いいぜ、と魔理沙は即答する。だが、それをやるにはちょっと準備が要るな、と外を見た。
「見張られてるな、私は。――――どうやら、阿求を連れ出すに決まってると思われてるらしい」
予想通りにしてしまいましたね、と阿求は笑っていた。笑い事じゃないぜ、と魔理沙は腕組みし、どうしようかと考える。
「私一人が突破するくらいはたやすい。だが、阿求を連れて、となるとあまり強引にはいけないな」
「私は構いませんけど」
「私が構うんだ。お前は逝く者だから後先考えずにいけるが、私はこれからがある。稗田家にケンカ売って生きていけるほど度胸はないぜ」
確かにそうだった。すみません、と謝る阿求に、魔理沙は気にするな、と言いながら八卦路を取り出した。
「魔理沙さん、まさか？」
「――――後で弁護を頼むぜ。阿求」
マスタースパークで家の壁に大穴を明ける魔理沙。そこから阿求を箒に乗せて、一気に飛び出した。しかし、稗田家の人間もそれくらい強引に来ることは分かっていたのだろう。一筋の炎が魔理沙の動きを妨害する。
「――――っ、妹紅か！」
そう、そこにいたのは藤原妹紅と上白沢慧音。見舞いの花束を持った慧音は鋭い眼差しで阿求を連れ出して何をする気だ、と問う。そんな言葉は無視し、どうして稗田家にいるんだよ、と魔理沙。
「見舞いに来たついでの泥棒退治だ。病人を無理やり引っ張り出して何をする気かは知らないが、許されることじゃないだろ？」
「違うって、これは阿求が・・・」
そこまで言いかけて、やめた。素直に話したって結果は知れてる。さっきから阿求の様子がおかしいのだ。どうやら箒で飛び出したと

きの衝撃すらも今の阿求には辛いのだろう。こんな状態の阿求を連れ出す話をしたって、通してもらえる確率は天文学的だ。
「いや、これは私の意志だ。稗田阿求は私が頂くぜ」
「魔理沙っ！　貴様、何を言っているのか分かってるのか！」
お前のやろうとしていることは誘拐だ。しかも、もう死に掛けの人間を連れまわして死を早めようとしている。そんなことをして何になる。慧音の説得に、魔理沙は笑う。
「バカじゃないのか？　お前、泥棒にどうして物を盗むのかって聞くのかよ？」
欲しいからに決まってるだろ！　魔理沙は刹那、再びマスタースパークを放つ。だが、その攻撃は妹紅によって軽く受け止められる。
「外道だな。――――こそ泥と今までは思っていたが、認識を改めるぞ。霧雨魔理沙」
お前は倒すべき悪人だ。妹紅の放つ炎の弾幕。魔理沙は阿求を乗せた箒で回避し、そのまま空を飛んで行く。それを二人は追いかけた。
「魔理沙さん・・・どうして？」
「お前のわがままなんてあいつらみたいな頭の固い連中が聞くはずないだろ？　ここは私が悪者になって引っ張り出すしかなかったんだ」
後で弁解を頼むぞ、と魔理沙は言う。追撃する二人はものすごいスピードで魔理沙に迫るが、魔理沙はこれ以上スピードを上げられない。阿求の体に負担をかけさせるわけには行かないからだ。だが、それは追撃する二人も同じこと。阿求に当てるわけには行かないと弾幕を撃ってはこない。これは魔理沙にとっては好都合。博麗神社まで逃げ込めればこっちの勝ちだ。魔理沙は焦る気持ちを抑えながら、後ろを何度も振り返って一直線に博麗神社を目指す。だが、その時だった。
ギリギリまで接近した妹紅が箒に火を放ったのである。そして阿求の体を抱きかかえると、すぐさま地上に降りて行く。魔理沙はく

そ、と呟いて箒から飛び降りた。だが、地上には慧音が待っている。もう人質はいない。こうなれば魔理沙の形勢は圧倒的に不利だ。
「――くそ、これだけは使いたくなかったんだが」
魔理沙は呟き、そして一枚のスペルカードを取り出した。
「――妖しの境界、日恋符『ロイヤルマスタースパーク』！」
太陽の光にも勝る圧倒的な火力が慧音に迫る。避けられるはずがない。慧音を吹き飛ばし、魔理沙はそのまま自由落下で近くにある用水路に落っこちた。幸い、萃香が先日降らせてくれた雨水が残っていて、魔理沙の体を受け止めてくれる。ずぶぬれになった魔理沙はゆっくりと慧音の立っていた場所に戻る。気絶してはいるが、まあ、大丈夫だろう。そして、目の前にいる妹紅を見た。
「阿求を返せ。――それは私のだ」
「本当に気が狂ったようだな。魔理沙。だが、渡すわけには行かない」
帰らせてもらう。妹紅は慧音を抱えると、そのまま阿求を連れて踵を返す。だが、魔理沙は待て、と彼女の肩を掴んだ。
「――眼を覚ませ、馬鹿者がっ！」
妹紅の拳が魔理沙の顔に直撃する。
「いいか、阿求はもう永くない。分かってるだろう？　お前の都合で勝手にしていい体じゃないんだ！　だから――」
「違い、ます・・・」
小さな声で、阿求が呟く。
「これは、私が頼んだこと。――霊夢さんに会いたくて。それで、私が魔理沙さんにお願いしたんです・・・」
か細い声にはもう力はない。いよいよ最後の時なのだろう。魔理沙はすぐさま妹紅から彼女を引ったくり、彼女をおんぶすると、博麗神社に向かって走っていく。妹紅は魔理沙の背を見つめ、そして、慧音を見た。
「お前、本当は分かっていたんじゃないか？」
「――それは、お前も同じことだろう？　妹紅」

慧音は焦げた髪の毛の先を指でつまみながら大きくため息。これはバッサリ切るしかないか、と涙目になっている。
「――まあ、一応常識的に振舞うのが大人ってもんだ。これで『魔理沙から阿求を奪還したが、事情を察した私たちの自己判断で彼女を博麗神社に送り届けた』とでも言っておけば私たちの責任問題ってことで事が済む。魔理沙は私たちがぶちのめして十分に反省させたってことで大丈夫だろ」
「――まさか、妖しの境界をぶつけてくるとは思わなかったな」
危うく私も死ぬところだったぞ。慧音は笑うが妹紅は表情を曇らせる。どうした？　と慧音。
「――慧音。お前はまだ死なないよな？」
「何を言ってるんだ、突然」
「お願いだから、お前は長生きしてくれよ」
こんな悲しくて寂しいのは嫌だ。妹紅の言葉に、慧音は笑う。
「ああ、努力はしよう」

第四章・御阿礼の子　その者の名

「がんばれよ、阿求。もう少しで博麗神社だ」

魔理沙は阿求の体を揺らさないように気をつけながら急ぐ。背中越しに伝わる阿求の鼓動は弱い。魔理沙は焦っていた。このまま間に合わないのではないかと。

「霊夢さんは、言ってたんです・・・」

不意に、阿求は呟く。

「妖怪も、人間も、同じようなものだと」

余計なことは喋らなくてもいい。魔理沙はそういうのだが、彼女は話を続ける。

「本当に、そうでした。――――妖怪は、人間にとって必ずしも悪ではないんですね」

博麗神社のある山の前までようやくたどり着いた。後はこの石段を登るだけ。しかし普段から空を飛んでやってくる魔理沙にはこの石段はあまりにも過酷だ。その上今日は阿求を背負っている。くそ、と呟いて魔理沙は一気に登り始めた。

「阿求になって、ようやく分かったんです。――――どうして、私がいたのか。どうして、幻想郷縁起を書き続けなければならないのか」

「阿求、分かったから。――――もうすぐ博麗神社なんだから、その

時に霊夢に言えばいいじゃないか」

今日はやけに暑い夜だ。魔理沙の頬に汗が伝わる。しだいに体力も限界に近付いてきて、魔理沙のペースも一気に落ち始めた。息を切らし、魔理沙は石段を進む。夜風に吹かれて帽子が飛んでいった。そんなことすら気にも留めずに魔理沙は先に進む。

「妖忌妃さまは・・・妖忌妃さまの目指した理想を・・・紫さんは・・・」

「阿求？」

「――争いのない、世界を・・・人と、妖怪が、一緒に」

「阿求！　くそっ！　霊夢！　霊夢―っ！！」

魔理沙の叫びがむなしく響く。だが、その声は霊夢の耳に届いていた。たまたま賽銭箱の中を確認しにやってきていた霊夢は魔理沙の叫びを聞き、石段の方までやってきた。

「魔理沙！　――それに・・・阿求？」

「霊夢？　――阿求！　ほら、霊夢だぜ！　さ、久しぶりに三人で遊ぼうぜ！　何して遊ぶ？　鬼ごっこか？　かくれんぼ？　あ、前にやったキュウリで河童釣りするのもいいな・・・――なあ、阿求」

「――わたしは、みこと、いっしょに――――との、りそう」

「阿求！」

うそ、と霊夢は呟いて石段を飛び降りる。魔理沙からすぐに阿求を引き離し、彼女の体を抱きかかえる。

「馬鹿っ！　どうして、どうして来たのよ！　――――こんな時に・・・」

霊夢は阿求を強く抱きしめて呟く。

「こんなことされたら・・・自分で言ってたこと、守れなくなるじゃない」

霊夢は涙を流し、阿求を見つめる。ぼんやりとした目で、阿求は霊夢を見て、ゆっくり微笑んだ。

「れいむ、さん・・・さいごまで、わらっているんじゃなかったんですか？」

「馬鹿っ！　あんたのせいよ・・・あんたのせいで、泣いてるんじゃない」

「――――れいむさん・・・――――わたし、わかったんです」

「何よ・・・今更何が分かったのよ・・・？」

「わたしと、あなたは、ここにいなくてはならないものだって」

「今更何言ってるのよ。――――当たり前よ、博麗の巫女と御阿礼の子は、幻想郷に必要な人間よ。――――だから、また、百年後に帰ってきなさい。ここに、幻想郷に」

「――はい」

魔理沙は二人を見つめ、満足げに微笑んだ。

「――安心しろ、阿求。お前のこと。私たちは忘れない。百年後にまた会おうぜ。そしたら、今度こそいっぱい遊ぶんだ」

「――れいむさん・・・まりささん。――ありがとう」

魔理沙への処罰は妹紅と慧音の計らいもあってか軽いもので済んだ。しかし、幽香の花畑の花を大量に盗んだ罪状は消えず、その後、しばらくの間、魔理沙の姿を見たものはいなかったという。

阿求の遺体は彼女の遺言の希望通り、霊夢と最初に出会った場所に手厚く葬られた。墓石には、何故か霊夢の名前も彫ってある。何故こんなことになっているのかと稗田家の人間が石屋に問い詰めたところ、どうやら霊夢が無理を言ってやらせたらしい。これで死んだ後のお墓の心配は要らないわね、と霊夢は笑っていた。

そして、時は過ぎ、幻想郷は連日の猛暑で予想通りの大干ばつの被害を受けた。紅魔館近くの湖の水位もすっかり下がり、里のほうでも水不足が深刻になってきていた。作物は当然枯れ果て、今年は幻想郷始まって以来の凶作になること間違いなしだ、と騒がれてい

る。
　そんな中でも博麗霊夢は変わらない。いつものように参拝に来るものはなく、賽銭もなし。収入がないから食料もない。ないなら稼ぐ。連日のように海の家で仕事をし、完全に里の人間たちには海の家の女主人と認識され、巫女であることを完全に忘れられていた。

「おーい、霊夢さん！　焼きそば一つ！」

「こっちはラーメン追加！」

「はーい。ちょっと待っててね！」

　霊夢はアルバイトのミスティアと一緒にあくせく働いている。だが、その刹那、霊夢は意識を失ってぱたりとその場に倒れたのだ。

「霊夢さんっ！！」

「おい、どうしたんだ！」

　海の家の異変に気が付いた今日の監視員、魔理沙はすぐに海の家に向かう。倒れている霊夢を抱きかかえ、魔理沙はすぐに永遠亭まで飛んでいった。

「――――博麗の巫女は限界ね。向こうが仕掛けてくるなら今か」

　一部始終を見ていた紫は呟き、そして藍を呼ぶ。

「お呼びでしょうか、紫さま」

「稗田阿求は死に、博麗霊夢が弱っている今。幻想郷の人間と妖怪

のパワーバランスは完全に崩れ去ったわ。事を起こすものがいるならば、今でしょうね」

「――――と、言いますと？」

察しなさいよ、と藍の頭を扇子で小突く紫。

「――――ついに始まるのよ。妖怪と、妖怪同士の戦争が、ね」

第四章・御阿礼の子　／了

第五章・夏に降る雨　序章

ついに次代博麗の巫女誕生・・・か？

本日未明、博麗の巫女、博麗霊夢によって次代の博麗の巫女として山の神社の巫女、東風谷早苗が指名された。いつから博麗の巫女が指名制度になったのかはさておき、この突然の指名に山の神社側は困惑している模様。我々の取材に対しても「現在、コメントは差し控えている」との回答。

現在、博麗霊夢は未婚であり、当然彼女の血を引く子供は存在しない。ついに幻想郷のバランサーの血が途絶えてしまうのか。人間も妖怪も今後の博麗霊夢の行動から目が離せない。

文々。新聞より抜粋

第五話・夏に降る雨

博麗霊夢が倒れた次の日、博麗神社には双成ミキの姿があった。いまだ目覚めない博麗霊夢を看病するためにやってきたのである。居間で眠りこけている萃香に声をかける。どうやら彼女は朝まで看病していたらしい。全く起きる気配を見せない。仕方なく勝手にあがることにしたミキは霊夢が寝ている奥の部屋に向かった。

「霊夢さん・・・」

霊夢は静かに眠っている。顔色は悪いが危険な状態というわけではなさそうだ。ミキは霊夢の横に座り霊夢を見つめる。

「今の幻想郷に、私は必要ないんです」

ミキは呟き、霊夢の額に触れる。

「でも、今の幻想郷には、あなたの力が必要なんです」

触れた手が不意に光を放つ。すると、霊夢がゆっくりまぶたを開けたではないか。

「――ミキ？　・・・あなた、今、何をしたの？」

一瞬でミキの仕業だと理解した霊夢は彼女を睨む。しかし、それに答える余裕は今のミキにはなかった。気絶するようにそのままぱたりと霊夢の上に倒れる。

「ミキ・・・――――何をしたのかは知らないけど、ありがたい限りね」

力が確実に戻っている。今なら紫にだって負ける気はしない。霊夢は起き上がってミキを代わりに寝かせると、すぐさま神社を飛び出して魔法の森へ向かった。

霧雨魔法店は相変わらず人気がない。ガラクタの山が積もり積もって今ではまるでゴミ屋敷のよう。そんな場所に降り立った霊夢は玄関を乱暴に叩いて魔理沙を呼ぶ。

「――あー・・・。朝っぱらから何の用だぜ・・・って霊夢！？」

「魔理沙、行くわよ。――――無法妖怪どもを蹴散らしに」

力を貸して頂戴。霊夢から来た初めての異変解決のお誘いに魔理沙はああ、とすぐに答えた。

「待ってろ、すぐに支度する！」

「これで戦力は十分ね・・・後は、念のために早苗にも声をかけておくか・・・」

霊夢は笑う。

「最後の、戦いだものね」

誰もいない博麗神社の母屋でミキは目覚めた。霊夢がいないことには別段驚くこともなく、彼女は穏やかに微笑んでいた。

「よかった。・・・私の力、役に、立てたかな・・・・」

鉛のように重たい体をゆっくりと起こし、彼女は辺りを見回した。外はさっきまで晴れていたというのに、黒い雲が遠くに見える。

「雨が降りそうですね」

呟くミキ。その刹那、そうだねぇ、と誰かが返事をした。驚いて周囲を見渡すミキだったが、誰の姿もないし気配もない。そう、ここには誰もいないのだ。

「―――萃香さん！？」

さっきまで居間で寝ていたはずの萃香がいない。霊夢の看病で疲れているはずなのに、一体どこへ行ってしまったのだろうか。

その答えは、すぐに彼女の知るところとなる。

突如、居間に萃香が飛び込んできた。家具を吹き飛ばし、体を壁に打ち付けた彼女は身動きひとつせずにそのまま気を失ったのだ。ミキは駆け寄って彼女の状態を確認する。――――胸に突き刺さった銀色の槍。その槍が何なのか、誰のものなのか、ミキは知っている。

「――――萃香さん・・・萃香さん！」

「あらぁ。こんなところにいたの。ミキちゃん」

振り返る。聞き覚えのある声。もう二度と会いたくなかった人間の声だ。

「お姉さん、探してたのよ。あなたの事」

「――――要、由里香」

銀色の武器は異種族狩りの証。そして、槍は剣の次に高位の存在を示す武器。――――かつて、最強の人形遣いとして外の世界に君臨し、あらゆる異種族を討伐したという退治屋。数年前に外の世界の吸血鬼に殺されたはずだったが、その身が朽ち果てた今となっても魂だけを抜き取った人間の体に自分の魂を移し変えて生き続けている魔術師。

「お姉さんね。やっぱりあなたの体が欲しいのよ」

「・・・」

「この世で最も完成された、ツインヒューマの体が、ね」

その手には、大きな鞄。背は高く、すらっとしたモデル体系の美女だった。それは、ミキの知っている要由里香の姿ではなかったものの、風になびく長い赤髪と赤い瞳が彼女であることを示している。

「ねえ、人生もう嫌なんでしょう？　だったら、やっぱり私のものにならない？　――――じゃあさ、とりかえっこにしようよ。私の今の体、さ。ミキちゃんの好みのタイプでしょう？」

「狂ってる。――――あなたやっぱりおかしいです！　何で幻想郷まで、追ってくるんですか！？」

「もうさぁ、向こうの世界にも未練なんてないんだよねぇ。ヤナセはもう手の届かない場所に逃げちゃったし、ユウはもう私の助けなんか必要ないくらい立派な男の子になっちゃったから。だったら、もうやることなんて自分磨きくらいしかないじゃない？」

で、目の前に理想の体がある。ならそれを貰うのが一番手っ取り早いじゃない。由里香は土足で母屋に上がりこむと、ミキを捕まえようと手を伸ばす。だが、刹那に萃香は胸の槍を抜き、手をかざして二人の間に割って入ったのだ。

「まだやる気？　鬼のお嬢ちゃん？」

「霊夢の友達に、手出しはさせないよ」

「す、萃香さん・・・」

「なら、死んじゃえばいいよ」

由里香の鞄が開いたのを見て、咄嗟にミキが萃香の体を抱き寄せた。ミキはあの鞄の中に何が入っているのか知っている。あの鞄こそ、彼女の人形師としての全てであり最大の武器となる魔道具。――簡単に言えばどんなものでも無限に入ってしまう魔法の鞄だ。そして、あの中には古今東西ありとあらゆる人形が入っている。

黒い影のような爪が伸び、萃香に迫る。ミキは由里香に背を向けて彼女を庇うと、爪はゆっくりと鞄に戻っていった。

「あぶないあぶない。綺麗なお肌に傷が付いたら大変だものね」

「萃香さん・・・逃げてください」

「逃げるったって――――どうやって」

「私が・・・何とかしますから」

ミキは一度だけ萃香を強く抱きしめた。そして、彼女を離すと由里香に分かりました、と言う。

「とりかえっこ、しましょう」

「ミ、キ・・・？」

「その代わり。萃香さんを逃がしてあげてください」

その言葉に、ぷっと由里香が吹き出した。

「泣かせるわねぇ。自分が犠牲になるから、友達は助けてくださいって？　――――昔、同じことやった人がいたっけ」

「どうするんですか？　――――萃香さんを逃がしてくれないなら、私がここで死にますけど」

床に転がっていた槍を拾い上げて、刃先を自分の首元へ持っていく。それを見て、由里香はいいわよ、と素直に返した。

「・・・分かったわ。条件を呑みましょう」

「――――萃香さん」

槍を捨てて、萃香のほうを見る。ミキは穏やかに微笑んでいた。

「霊夢さんの力に、なってあげてくださいね」

萃香の背に手を当てて、母屋の外へと連れて行く。そして、部屋に残った由里香のほうを向き、ミキは自分の服に手をかけた。はらり、と着ていたワンピースが床に落ちて、真っ白で美しい彼女の体が露になる。萃香は振り返り、その姿を見ると、舌打ちして博麗神社を後にした。

「――あなたの、好きに、してください・・・」

「急にしおらしくなっちゃったわね。なんか、興ざめだけど、まあいいわ」

由里香はそう言いながら、ミキの体を指でなぞり、怪しく笑った。

「ちなみに、あなたと同じことをした人の話だけどね」

優しくミキの体を抱き寄せて、耳元でささやく。

「――結局、どっちも助からなかったわよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0796l/

東方漫遊記

2011年12月14日00時45分発行